

景 ○地は草の名、われもか。

榆莢 ヲアキにれの名。
榆莢 ヲアキにれの名、形の似たるにヨリて名づく。漢書、食貨志、爲二穀重種ヲ用、更錦ニ一。ユイ英、錦、榆莢。ユイ

椋 椋(木部八番)に同じ。佛經の「椋」に特に此字を用ふ。此病治無藥、惟有ニ一四卷經ニ

椋 (國字)
椋 椋(木部八番)に同じ。佛經の名。白居易詩、人間此病治無藥、惟有ニ一四卷經ニ用ふ。

椋 (國字)
こまひ(木舞)壁の下地、しの竹又は割竹を縦横に絡みつけたるもの。

椋 (國字)
はにざ、はんざ(邑)水をつぎ入れる器、柄に水の通路あり。

椋 (國字)
むろ、圓柏に似たる針葉喬木の一種、葉は柔く、老樹は青き實を結ぶ、材は水湿に堪ふ。杜松の屬。

椋 (國字)
椋(木部八番)に同じ。佛經の名。白居易詩、人間此病治無藥、惟有ニ一四卷經ニ用ふ。

椋 (國字)
こまひ(木舞)壁の下地、しの竹又は割竹を縦横に絡みつけたるもの。

椋 (國字)
はにざ、はんざ(邑)水をつぎ入れる器、柄に水の通路あり。

椋 (國字)
むろ、圓柏に似たる針葉喬木の一種、葉は柔く、老樹は青き實を結ぶ、材は水湿に堪ふ。杜松の屬。

椋 (國字)
椋(木部八番)に同じ。佛經の名。白居易詩、人間此病治無藥、惟有ニ一四卷經ニ用ふ。

椋 (國字)
こまひ(木舞)壁の下地、しの竹又は割竹を縦横に絡みつけたるもの。

椋 (國字)
はにざ、はんざ(邑)水をつぎ入れる器、柄に水の通路あり。

椋 (國字)
むろ、圓柏に似たる針葉喬木の一種、葉は柔く、老樹は青き實を結ぶ、材は水湿に堪ふ。杜松の屬。

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

榮 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

椋 (イ) 庚
○あをざり(青桐)きり(桐)○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所(屋翫)○

【楮】カク 一日「楮」楮魚。【楮】カク 琴の異名、枯れたる桐にて作るが故。莊、德充符「童子楮一」而賦「注」楮、琴而理也。【楮死】カク 枯れて死ぬ。【楮枝】カク 枯れえだ。莊子「右擊一」而歌「森氏之風」楮枝。【楮葉】カク かわきたるつち。孟、陳文公「上食一」下飲「黃泉一」。【楮木】カク 草木がかれしむ。楚辭「草木搖落時一」○やつれる。【楮木死灰】カク 形は枯木の如く、心は死灰の如く、死んで生靈なし。人の無心無慮なるに喩ふ。莊、齊物「形固可使一如楮木、而心固可使一如死灰一乎」。

【稟】カク 楮(前條)に同じ。

【權】カク 〇まるきはし(獨木橋)〇政府にて物品を專賣する。又其の事「茶一」「酒一」「官一」〇税を賦課する。「征一」「稅一」漢書、武帝紀「初一酒酷一〇からたち、柚木の如き實あるもの(根)」。【權會】カク 買賣兩者の間に介して其の利を占する。會は會。漢書、景十三王傳「趙王孫、權、使、使、即、經、實、買、人、一」。【權之利】カク 管は幹、商估のこ

とに干與し、其の利を専ら官に收める。權は丸木橋、其の利を獨占すること、猶ほ此の權に由らざれば、行くことを得ざるが如し、官營專賣の利益。漢書、車千秋傳「身弘羊爲一御史大夫一八年、自以爲一國家一實一」。【楮】カク 〇さね(核)「肴一」〇大車のくびき、輓に通ず。蜀都賦「商旅聯一」。【楮】カク 〇たる、かめ、さかだる(酒器)「酒一」殘一左、成十六「使、行人執一承飲一〇水を貯ふる器、かめ「瓶一」〇器物のおほひ、ふた(蓋)〇一藤は蔓生植物の一種、もたま、あけびに似たる藤。本草拾遺「藤如通草、其實三年方熟」。【榦】カン 〇榦の兩端のはしら「榦一」〇もと、みき。〇井一は井の上の木圍「榦」けた。又漢武

帝の榦の名、ひけた状に築き、高さ五十丈ありきといふ(漢書、武帝紀)〇え(柄)〇やまぐは(柘)書、禹貢「柘一栝一柘一〇ただす(正)」。【楮】カク 〇榦(木部八畫)に同じ。〇とひ、ひ、水を通ずる具。【楮】カイ はんのき。【楮】カイ 〇あはす(合)易、繫辭「男女一精、萬物化生一〇こじつけ、もと其の事なきに附會して成す、捏造する。左、桓十六「宣姜與一公子朔一〇急子一〇はかる(謀)〇やね(屋宇)〇たるき。〇かちのき(楮)〇がまふ、武器を持ちて敵を待つ「身一」〇かかかはる、關係する「先方一」はす〇がまへ、やづくり、家屋のつくりかた。【楮】カク 〇あはす(合)易、繫辭「男女一精、萬物化生一〇こじつけ、もと其の事なきに附會して成す、捏造する。左、桓十六「宣姜與一公子朔一〇急子一〇はかる(謀)〇やね(屋宇)〇たるき。〇かちのき(楮)〇がまふ、武器を持ちて敵を待つ「身一」〇かかかはる、關係する「先方一」はす〇がまへ、やづくり、家屋のつくりかた。

【榦】カン 〇榦の兩端のはしら「榦一」〇もと、みき。〇井一は井の上の木圍「榦」けた。又漢武

帝の榦の名、ひけた状に築き、高さ五十丈ありきといふ(漢書、武帝紀)〇え(柄)〇やまぐは(柘)書、禹貢「柘一栝一柘一〇ただす(正)」。【楮】カク 〇榦(木部八畫)に同じ。〇とひ、ひ、水を通ずる具。【楮】カイ はんのき。【楮】カイ 〇あはす(合)易、繫辭「男女一精、萬物化生一〇こじつけ、もと其の事なきに附會して成す、捏造する。左、桓十六「宣姜與一公子朔一〇急子一〇はかる(謀)〇やね(屋宇)〇たるき。〇かちのき(楮)〇がまふ、武器を持ちて敵を待つ「身一」〇かかかはる、關係する「先方一」はす〇がまへ、やづくり、家屋のつくりかた。

【榦】カン 〇榦の兩端のはしら「榦一」〇もと、みき。〇井一は井の上の木圍「榦」けた。又漢武

帝の榦の名、ひけた状に築き、高さ五十丈ありきといふ(漢書、武帝紀)〇え(柄)〇やまぐは(柘)書、禹貢「柘一栝一柘一〇ただす(正)」。【楮】カク 〇榦(木部八畫)に同じ。〇とひ、ひ、水を通ずる具。【楮】カイ はんのき。【楮】カイ 〇あはす(合)易、繫辭「男女一精、萬物化生一〇こじつけ、もと其の事なきに附會して成す、捏造する。左、桓十六「宣姜與一公子朔一〇急子一〇はかる(謀)〇やね(屋宇)〇たるき。〇かちのき(楮)〇がまふ、武器を持ちて敵を待つ「身一」〇かかかはる、關係する「先方一」はす〇がまへ、やづくり、家屋のつくりかた。

【榦】カン 〇榦の兩端のはしら「榦一」〇もと、みき。〇井一は井の上の木圍「榦」けた。又漢武

【榦】カン 〇榦の兩端のはしら「榦一」〇もと、みき。〇井一は井の上の木圍「榦」けた。又漢武

【榦】カン 〇榦の兩端のはしら「榦一」〇もと、みき。〇井一は井の上の木圍「榦」けた。又漢武

【榦】カン 〇榦の兩端のはしら「榦一」〇もと、みき。〇井一は井の上の木圍「榦」けた。又漢武

【榦】カン 〇榦の兩端のはしら「榦一」〇もと、みき。〇井一は井の上の木圍「榦」けた。又漢武

【榜眼】^{ハウガン} 進士の試即ち官吏登用試験に第二番の成績にて及第する。榜は掲示札、眼は二の隱語、眼は必ず二ある故。雲龍漫鈔「世目三狀元第二人爲三」

【榜具】^{ハウキ} 罪人を拷問する具。唐書、敬羽傳「環以三」

【榜札】^{ハウサ} ふれを掲示するたてふだ。制札。

【榜示】^{ハウジ} たて札を立てて人に示す。掲示する。

【榜人】^{ハウジン} せんとら。張嶽、七命「一奏三探獲之歌」舟人・舟子。

【榜尾】^{ハウビ} 船をこぐかぢの音。賈師泰詩「一催曉渡三江心、暮聽吳娃畫時曲」

【榜船】^{ハウセン} かいにて船をこぐ。南史、永百年傳「自一送一妻」神船。

【榜楚】^{ハウソ} 人を罰してむちうつ。楚もむち。司馬光詩「符移空浩浩、一儆警三」榜答。

【榜答】^{ハウコ} むちうつ。史、張耳傳「一數干」榜楚。

【榜服】^{ハウフク} むちうちて罪に伏せしむ。漢書、淮南王傳「張一」

【榜掠】^{ハウリョク} 罪人をむちうちて拷問する。史、李斯傳「趙高治、一」千餘」

【榜令】^{ハウレイ} 木の札にかき記したる命令書。

【槃】^{ハン} **槃** **盤**
○たらひ(承水盤)手に持つ小さき盥。禮、内則「少者奉」、長者奉水。槃、盥面盆。○たのしむ(樂)般の借字。詩、衛風「考一在澗」考は成、一停はとどまる、進まず、とどこほる。

【槃】^{ハン} 水を注ぎ手をあらふ器。國語「奉一以三」

【槃】^{ハン} 黃帝の史官、孔甲の作りし銘、凡二十六篇を一中に書して法戒とせしもの。史、魏其武安侯傳「田蚡有辯口、一」

【槃】^{ハン} びつこひく、跛者の歩む貌。數一に隨に行。史、平原君傳「有二覺者、一」

【槃】^{ハン} 前條に同じ。

【槃】^{ハン} 兩足を前に出して笑の如くに坐す。莊、田子方「公使二人視一之、則解衣一」

【槃】^{ハン} へめぐる。たちふるまひする。漢書、何武傳「法一」

【槃】^{ハン} ひるがりわだかまされる木。山海經「有二先民之山、又有二」千里」

【榧】^ヒ **榧** **尾**
かや、常緑喬木の一、葉剛く尖

【榧】^ヒ **榧** **尾**
り、雄樹は枝立ちて花咲き、雌樹は枝垂れて蜜の如き實を結ぶ、食用とし又油をしほるべし。榧。

【榧】^ヒ **榧** **尾**
のき(榧)ひさし、椽の端に在るもの。西京賦「榧椽文」

【榧】^ヒ **榧** **尾**
ぬるで、ふしのき、山野に自生する、漆に似たる木。山海經「蒙山多」木」白榧木、將軍木。

【榧】^ヒ **榧** **尾**
日の出づる所にありといふ神木の名。扶桑の扶に通ず。説文「一桑神木、日所出也」

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧木之地」榧木は扶桑に同じ。淮南子「東方之樹、自一碣石山」過三期解「買二大人之國、東至二日出之次、榧木之青土樹木之野」

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【榧】^ヒ **榧** **尾**
榧ははねつるべ(汲水機)

【樂容】^レ音樂に合する身ぶり、即ち舞。
 【樂律】^レ音樂の調子。
 【樂易】^レやすらかにたのし。荀子「安、利者常一、危、害者常憂險」
 【樂逸】^レ次第に同じ。樂快。
 【樂快】^レたのしくあそぶ。史、燕召公世家「燕國殷富、士卒一、逸樂」
 【樂幽】^レたのしくよるこぼしき場所。○人界を離れし快樂郷。○天國・樂樂。
 【樂郊】^レたのしく場所(詩、魏風、碩鼠)樂郊。
 【樂康】^レたのしみやすんず。楚辭、九歌「五音紛兮繁會、君欣欣兮一」
 【樂欣】^レたのしみよるこぼ。張衡、洛陽賦「悅三軍生之一」
 【樂樂】^レたのしきところ。蘇賦詩「嗟哉此一、無乃妾子歌」
 【樂樂】^レたのしき場所。○樂士・樂地・樂樂・樂園。○たのしき身分境遇。○樂地。
 【樂會】^レたのしきまると。陸機詩「一、其自、古、悼、別、登、獨、今」
 【樂懼】^レたのしむ。たのしみ。晉書、王羲之傳「恆恐、兒輩覺、其、一、之、趣、一、歡、樂、樂、樂、樂、樂」
 【樂歡】^レ前條に同じ。○歡樂。
 【樂觀】^レ哲學にて世事をすべて快樂なりと観する義。悲觀の對。○樂

天觀。
 【樂今】^レよろこばし。たのし。今は助字。夏人歌「一、一、四、牡、騶、今、六、特、沃、今、一、樂、只」
 【樂樂】^レ仕事をなすをたのしむ。漢書、成帝紀「樂、成、以、康、寧」
 【樂古】^レ古の道を樂しむ。後漢書、安帝紀「篤學、一、仁、惠、愛、下、一、好、古」
 【樂娛】^レたのしみ。易林「居者無憂、保我、一、一、娛、樂」
 【樂園】^レうれへなくたのしき土地(詩、魏風、碩鼠)樂園。
 【樂歲】^レ豐年。孟、滕、文、公、一、終、身、飽、
 【樂善】^レ何事にも快活ならしめて、くづくづする義。○冠子「一、則、徒、錄、之、人、至、矣」
 【樂山】^レやまをたしむ。一説に樂は音ガウ、好む。論、雍、也、知、者、樂、水、仁、者、一、
 【樂只】^レたのし。只是助字。詩、小雅「一、君、子、萬、壽、無、期」
 【樂志】^レ志を樂します。禮記「獨樂、一、其、志、一」
 【樂事】^レたのしきこと。愉快なる事。謝靈運、擬魏太子鄴中集詩序「天下、其、美、景、賞、心、一、四、者、難、一、并」
 【樂所】^レたのしきばし。易林「乾作、聖、男、坤、爲、智、女、配、合、成、就、長、住、一、一、樂、地」

【樂善】^レたのしみよるこぼ。詩經「君子、一、受、天、之、祜」
 【樂水】^レみづをたのしむ。一説に樂は音ガウ、好む。樂山を見よ。
 【樂生】^レ此世に生存するを喜ぶ。漢書、刑法志「民亦新至、兵革之禍、一、人有、一、之、慮」
 【樂善】^レ善を行ふをたのしむ。五代史、和凝傳「性、一、好、稱、二、道、後、通、之、士」
 【樂戰】^レ氣もちの善い。史、楚世家「得、一、一、快、戰」
 【樂宅】^レたのしきすまひ。管子「安樂、一、享、祭、而、臨、吟」
 【樂道】^レみちをたのしむ。孟、盡、心「古之賢王、好、善、而、忘、一、古、之、賢、士、何、獨、不、然、樂、三、其、道、而、忘、二、人、之、勞、一、漢書、揚雄傳「實好、古、而、一、其、意、欲、求、二、文、章、一、成、名、于、後、世、一」
 【樂教】^レたのしみふける。湯、衍、顯志賦「忽、道、德、之、珍、麗、兮、務、富、貴、之、一、一」
 【樂地】^レ樂地に同じ。晉書、樂廣傳「名、教、內、自、有、一、一」
 【樂天】^レ天命をたのしむ。易、繫辭「一、一、知、命、故、不、憂」
 【樂觀】^レ哲學にて現實の世界を最善の者として人生をたのしむ。○觀世觀の對。○樂觀。
 【樂士】^レたのしきところ。詩、魏風、碩鼠「一、一、愛、得、一、我、所、一、樂、地」

【樂德】^レ德を樂しむ。淮南子「古之存、一、己、者、一、而、忘、賤、故、名、不、動、一、志、樂、道、而、忘、貧、故、利、不、動、心」
 【樂命】^レ天命に安んじて分外の事を求めず。李白詩「男兒百年且、一、一、樂、天、命」
 【樂樂】^レ圖手てつねて樂し。陶器。もと秀吉の樂樂第の樂字を印せしもの。
 【樂浪】^レ兩漢の郡名、幽州に屬す。晉は平州、一郡、今の朝鮮平安道平壤府治。張衡、東京賦「四、包、大、樂、一、東、過、一、一」
 【樂樂】^レ○甚だたのしき貌。荀、僞效「一、一、其、執、道、不、殆、也、一、一、一、つろぎ安んずる貌。○たやすき貌。○易、易」
 【樂樂】^レ樂も極度に達すればかなしみを生ず。劉向列女傳「陶答子妻曰、樂極必哀、一、漢、武帝、秋、風、辭、歡、樂、極、兮、哀、情、多、一」
 【樂而不淫】^レ樂みて其の正しきを失はず。論、八、佾、子、曰、雖、一、一、樂、以、忘、憂、一、一、道、を、樂、み、て、其、の、身、の、憂、ある、を、知、ら、ず、論、述、而、一、發、憤、忘、食、一、一」
 【樂樂】^レ樂も多し。哀、一、一、たのしみよるがらむ故なり。文中「一、一、一、一、樂、者、必、好、一、一」

【槻】

○とねり。○つき、つきけやき、櫛の一種、弓材に用ふ。

【樛】

○まがる、くねる、木が下より曲る。○くる、むすぶ(絞)纏に通ず。○むすほる(交)○めぐる、めぐらす(周)○圓木の名、つき。

【樛】^レまがりて高し。
 【樛】^レまるとむすぼる。漢書、五行志「天雨、一、草、葉、相、一、大、如、一、彈丸、一、一、纏、結、糾、結」
 【樛】^レまがれるえだ。謝朓詩「一、雙、復、低」
 【樛】^レ枝の下り曲れる木。詩、周南、南有、一、一、一、一、
 【樛】^レめぐりゆく。北征賦「涉、一、長、路、之、輪、懸、一、一、遠、紆、以、一、一、周、流」

【權】

ひくけ。落葉灌木の一、葉は三裂し、夏秋の間、赤又は白色五瓣の花を著く、朝開きて夕にしほむ、故にはかなき喩とす。はらす、きばちす、あさがほ「芳」朝「玉篇」木「朝生夕

【楨】

【楨】^レ朝鮮の異稱、むくげの花多きが故。古今記「君子國、地方千里、多、一、木、楨、花、一、元、中、記「君子之國、地方千里、多、一、木、楨、花、一、一、一、一、は朝開きて色鮮かなるによりて比すと。

【楸】

【楸】^レむくげの花。説文「楸、木、楸也、朝花暮落、一、一、移、り、り、の、速、なるに喩ふ。孟郊、春、交、詩「小、人、一、一、心、朝、在、夕、不、存」
 【楸】^レ楸花一日變。○むくげの花は朝きて夕にしほむ。人の榮華のはかなきに喩ふ。白居易、放、言、詩「松、樹、千、年、終、是、朽、楸、花、一、日、自、成、一、一」
 【楸】^レむくげのいけがき。沈約詩「一、一、疎、復、密、荆、原、新、且、故、一、一、楸、澤」

【楸】

【楸】^レ鐘が横ばりて大いなり。左、昭二「一、一、則、不、容、今、鐘、一、突」

【楸】

○はこの底(筐)○圓くぬぎ

【榔】

【榔】^レ榔(木部八畫)に同じ。
 【榔】^レひつき。榔は棺の外郭に韓愈詩「又如、遊、一、九、原、墳、墓、包、一、一」

【楸】

むく、むくろじ(無患子)山野に自生する喬木の一、葉は藤に似て大、夏、黄白色の小花開き、黄色の實を結ぶ、核は堅く黒く光澤あり、羽子の球、又は念珠と爲す、果皮は洗濯用に供す。○木楸子。

【桼】

○うつ(檜)○はしら(柱)柱の正しきを欲すれば、先づ繩を以て柱の四角に垂れ、繩皆柱に附けば則ち柱正しきなり。考工記「置、一、以、縣、一、一、侯、の、正、中、射、的、の、ま、ん、な、か、一、一、轉、じ、て、ひ、ろ、く、正、中、の、者、の、義、と、す、
 ○門のなかじきり、門の中央の扉。○すれあふ。

【榭】

【榭】^レ榭(前條)に同じ。

【榭】

【榭】^レかしは、落葉喬木の一、標、に似て葉大いに、縁に深き刻あり。俗に大葉榭といふ。
 【榭】^レはけのき。南雅、榭木、榭榭心、注、心、一、別、名、一

【榭】

○しどみ、こほけ、木瓜の一、種、枝に刺多し、花は五瓣紅黄色、夏、梨に似たる一寸許の實を結ぶ。莊、天、運、禮、義、法、度、其、猶、一、一、黎、橘、柚、耶、其、味、相、反、而、皆、可、于、口、一、一、榭、子、一、一、榭、一、一、は、果、樹、の、名、く、り、ん。

【槽】

○かひをけ、かひばをけ、牛馬などの畜類に飼料を與へる桶「馬」○をけ、ふね、液體を容れる器「浴」○さかぶね、酒を醸す器。○ひ、とひ、かけ、板にて作りし通水路「架」○絃器の中空にして、兩面に革を張りたる所、どう(胴)○四旁高くして中陥り、をけの形せしもの「齒」○ちゅう(茶碓)「茶」○一、牙、は、柔、か、なる木にて造りしほこ。淮南、汜、論、一、一、牙、無、聲、一、一、一、一、は、あ、また、れ、を、け、雨、水、を、う、け、る、桶、
 【槽】^レ馬のかひばをけ。一説に榭は榭のふみ板。韓愈、韓、愈、説、一、一、奴、隸、人、之、手、一、一、一、一、之、一、一、一、一、
 【槽】^レ馬のかひばをけ。一説に榭は榭のふみ板。韓愈、韓、愈、説、一、一、奴、隸、人、之、手、一、一、一、一、之、一、一、一、一、

櫟

○サウ セウ 櫟 香
○澤の中の番人の居りて守る草様。○すくひあみ(擦摺)又それにて魚を捕ふ。すくひ。○たゆ、たつ(絶)漢書、外戚傳「命一絶而不長」

櫟

○クさび(櫟)何晏、景福殿賦「似瓊英」○木の名、材質堅し。

櫟

○木の長き貌「櫟」又、華葉落ちて幹のみ獨り立つ貌。○ふしづけ。柴を水中に積みて魚を取る。○木の長き貌。

櫟

○もみぢ、櫟の一種、我國にていふ紅葉。○しほむ、木の葉が落ちる。○岳、閑居賦「庭樹一以飄落」

櫟

○もみ、常緑喬木の一種、葉は羽状に排列して細く剛く、材は建築及器物を作るに用ふ。○うつ(撞)鐘や鼓などをうち鳴らす。史、司馬相如傳「一金鼓」○一は峻峙する貌。又木の高く茂る貌。

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○とほそ、くるる、ひらきどを閉閉する軸となる所(根)「月」○轉じてかなめ(主要)大切な所。○からくり、しかけ(機械)「機」○まんなか(中央)ねもと(根原)はじめ(始)○大政、大櫟。○やまに似、葉を食用とす。詩、唐風「山有」刺楸。○天、北斗の第一星、北極星。○櫟星は北斗の第一星、北極星。○櫟星は北斗の第一星、北極星。

櫟

○古、紙筆なかりし時、文字を書くに用ひたる木のふだ(櫟)○轉じて、文書、讀書者書などの事とす。○西京雜記「揚雄、始提、從諸計吏、訪殊方、過俗之語、作方言」○てがみ(簡札)王令詩「幸由西南風、吹寄我」

櫟

○茶をいふ、又晩く採りし茶、ばんち。○櫟の別名。

櫟

○一種の悪木、樹皮あらく漆に似、葉に臭氣あり。○んず(櫟)莊、逍遙遊「吾有大樹、人謂之、其大本擁腫不中繩、其小枝不中規、矩」○轉じて無用のものに喩ふ。○あみち(櫟)「山」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

櫟

○かち(櫟)船をこぐ具、舷にあり、長大なるを櫟といひ、短小なるを一といふ。蘇賦、赤壁賦「桂棹兮蘭」

【樂川】^レ ○陝西省長安の正南に在る樂川の別名。○唐の杜牧の號。杜牧「一」文集

【樂然】^レ 〇たごたとみだれる貌。字解參看。

【樂素小變】^レ 唐の白樂天の二妾の名。白居易詩「櫻桃樂素口、楊柳素善歌、小變善舞」

【樂中】^レ 〇鳥かごのなか。莊、逍遙遊「深墟十步一啄、百步一飲、不期不畜、子一」〇籠中。

【樂德】^レ 〇とりかご。劉琰詩「車禽爭肯戀一」〇轉じて自由を束縛するもの、官職などに喩ふ。北史、楊休之傳、此官清華、但煩劇、妨我賞適、眞是一

【樂籍】^レ 〇まがき、かき。寶丰詩「窮居積雨一」〇學術文章などの門戸に喩ふ。史通「馮衍許劭不足、窮一班范之藩籬」〇落、樂通ず。

【樂】^レ 〇ちんかつ、熱地に産する香木。〇蜜香樹。〇圓しきみ、佛に供へる木の名。〇標(國字)

【標】^レ 〇すゑ(木末、梢抄)又、高き枝。〇すゑ、はし(端末)〇めじるし、しるし(表識)〇商一〇

【標】^レ 〇すゑ(木末、梢抄)又、高き枝。〇すゑ、はし(端末)〇めじるし、しるし(表識)〇商一〇

【標】^レ 〇すゑ(木末、梢抄)又、高き枝。〇すゑ、はし(端末)〇めじるし、しるし(表識)〇商一〇

【標】^レ 〇すゑ(木末、梢抄)又、高き枝。〇すゑ、はし(端末)〇めじるし、しるし(表識)〇商一〇

【標】^レ 〇すゑ(木末、梢抄)又、高き枝。〇すゑ、はし(端末)〇めじるし、しるし(表識)〇商一〇

【標】^レ 〇すゑ(木末、梢抄)又、高き枝。〇すゑ、はし(端末)〇めじるし、しるし(表識)〇商一〇

【標榜】^レ 〇かんばん、札を立てて表す。史、匡侯世家、注「一」其里門「〇」名目をつけて、ほめたて。後漢書、黨錮傳「海内希風之流、遂共相一」〇己の主張をあらはしてかんばんにする。

【標本】^レ 〇みほん、博物一〇標品。【標名】^レ 〇ひな名をします。後漢書、儒林傳「若、師資所承、宜一」〇爲之置者、乃著之云」

【模】^レ 〇のり(法)かた(法式)てほん(軌範)〇かたち(形)〇かた、いがた(様型)もやう。〇のり、象、る、にせる、摹に通ず。〇おしひろめる。〇なでる(撫)〇木の名。淮南、草木「一」木生周公塚上、其葉春青夏赤、秋白冬黑、以色得正也」

【模楷】^レ 〇てほん、のり、楷は法式。後漢書、李膺傳「天下「一」李元禮」元禮は楷の字。北史、長孫紹遠傳「其容止堂堂、足爲當今一」〇模表、模則。

【模倣】^レ 〇かたどりまねす。〇模倣。【模憲】^レ 〇由り従ふべきてほん。蔡邕文「返饋一」〇示、世作、教」

【模範】^レ 〇てほん。魏志、阮瑀傳「例倣放蕩、行己寡欲、以莊周爲一」

【模】^レ 〇のり(法)かた(法式)てほん(軌範)〇かたち(形)〇かた、いがた(様型)もやう。〇のり、象、る、にせる、摹に通ず。〇おしひろめる。〇なでる(撫)〇木の名。淮南、草木「一」木生周公塚上、其葉春青夏赤、秋白冬黑、以色得正也」

【模楷】^レ 〇てほん、のり、楷は法式。後漢書、李膺傳「天下「一」李元禮」元禮は楷の字。北史、長孫紹遠傳「其容止堂堂、足爲當今一」〇模表、模則。

【模倣】^レ 〇かたどりまねす。〇模倣。【模憲】^レ 〇由り従ふべきてほん。蔡邕文「返饋一」〇示、世作、教」

【模範】^レ 〇てほん。魏志、阮瑀傳「例倣放蕩、行己寡欲、以莊周爲一」

【模】^レ 〇のり(法)かた(法式)てほん(軌範)〇かたち(形)〇かた、いがた(様型)もやう。〇のり、象、る、にせる、摹に通ず。〇おしひろめる。〇なでる(撫)〇木の名。淮南、草木「一」木生周公塚上、其葉春青夏赤、秋白冬黑、以色得正也」

【模楷】^レ 〇てほん、のり、楷は法式。後漢書、李膺傳「天下「一」李元禮」元禮は楷の字。北史、長孫紹遠傳「其容止堂堂、足爲當今一」〇模表、模則。

【模倣】^レ 〇かたどりまねす。〇模倣。【模憲】^レ 〇由り従ふべきてほん。蔡邕文「返饋一」〇示、世作、教」

【模範】^レ 〇てほん。魏志、阮瑀傳「例倣放蕩、行己寡欲、以莊周爲一」

【模】^レ 〇のり(法)かた(法式)てほん(軌範)〇かたち(形)〇かた、いがた(様型)もやう。〇のり、象、る、にせる、摹に通ず。〇おしひろめる。〇なでる(撫)〇木の名。淮南、草木「一」木生周公塚上、其葉春青夏赤、秋白冬黑、以色得正也」

【模楷】^レ 〇てほん、のり、楷は法式。後漢書、李膺傳「天下「一」李元禮」元禮は楷の字。北史、長孫紹遠傳「其容止堂堂、足爲當今一」〇模表、模則。

【模倣】^レ 〇かたどりまねす。〇模倣。【模憲】^レ 〇由り従ふべきてほん。蔡邕文「返饋一」〇示、世作、教」

【模範】^レ 〇てほん。魏志、阮瑀傳「例倣放蕩、行己寡欲、以莊周爲一」

【模】^レ 〇のり(法)かた(法式)てほん(軌範)〇かたち(形)〇かた、いがた(様型)もやう。〇のり、象、る、にせる、摹に通ず。〇おしひろめる。〇なでる(撫)〇木の名。淮南、草木「一」木生周公塚上、其葉春青夏赤、秋白冬黑、以色得正也」

【模楷】^レ 〇てほん、のり、楷は法式。後漢書、李膺傳「天下「一」李元禮」元禮は楷の字。北史、長孫紹遠傳「其容止堂堂、足爲當今一」〇模表、模則。

【模倣】^レ 〇かたどりまねす。〇模倣。【模憲】^レ 〇由り従ふべきてほん。蔡邕文「返饋一」〇示、世作、教」

【模範】^レ 〇てほん。魏志、阮瑀傳「例倣放蕩、行己寡欲、以莊周爲一」

○たかどの、重屋、二階建ての建物「高」玉「一」閣「登」○やぐら、ものみやぐら、望「一」城のやぐら(城観)「城」
 「一」○峯は山の嶺の鋭きもの。○凡そ重りて層をなすものをいふ「一車」「一船」
 【樓屋】たかどの。宋史、兵志「周庇」沃以泥築「一」
 【樓下】二階のした。後漢書、王愔傳「殺妻家十餘口、埋在「一」」
 【樓角】たかどののすみ。杜甫詩「一」風迴、城陰帶水香「一」
 【樓閣】たかどの。西京雜記「一」臺榭、轉相連注、白居易、長恨歌「一」參差五雲起「一」樓臺「一」
 【樓臺】二階づくりのいくさぶね。南史、王琳傳「乃大營「一」將圖「一」
 【樓宮】二階づくりの宮殿。馮子振、十八公賦「觀「一」於紫陌「一」
 【樓居】たかどののすみ。史、華武紀「公孫綽曰、仙人可、見、仙人好「一」」
 【樓觀】たかどの、ものみ。禮、月令「仲夏之月、可、以居高明」注「高明、謂「一」也」
 【樓月】たかどののつき。白居易詩「一」照銀早、波風盪憂新「一」
 【樓閣】やぐらのある門。二階づくりの門。史、蘇秦傳「前有「一」軒

【樓】後有「長較美人」樓門。
 【樓鼓】やぐらに備へたるつづみ。曹伯啓詩「隔碣催「一」薄暮、一」辨「一」深更「一」」
 【樓子】たかどの、二階家、子は助字。付、德詳詩、樓「一」十三房「一」
 【樓車】ものみやぐらのつきたるくるま。左、宣十五「登諸「一」、使呼「一」宋人「一」而告之「一」」
 【樓榭】たかどのと、うてなと、榭は屋根ある榭。德宗實錄「京師「一」之隙、創者、皆毀「一」」
 【樓上】二階のうへ。史、平原君傳「美人居「一」」
 【樓松】枝葉の笠の形をなせるまつ、かさまつ。抱朴子「一」、偃蓋松也「一」
 【樓道】たかどのにて吹く筵の音。李洞詩「一聲歌裏玉「一」」
 【樓前】たかどのの前なり。薛稷詩「野外樓初合、一」花正飛「一」
 【樓船】二階づくりの大ふね。高、平準書、大修昆池、治「一」、高十餘丈、一將軍の名、漢の武帝、編僕を以て「一」將軍と爲し、南越を擊つ。○一軍は水軍。玉海「招「一」募習水善、波排舟便利之人「一」一軍「一」水師「一」」
 【樓臺】たかどの。史、天官書「海旁臺氣、象「一」半參詩「一」重臺氣、邑里鐘「一」鼓人「一」」
 【樓中】たかどののなか。羅隱詩

【雨過晚涼生、一」枕簟清「一」】
 【樓臺】物見のやぐらと城上のひめがきと。宋書、桂陽王休範傳「表「一」治城池、修「一」二樓臺「一」」
 【樓殿】樓と宮殿と。齊書、林邑國傳「起「一」城池、一」王服、天冠如「一」佛冠、身披「一」香縵路「一」」
 【上樓】次條に同じ。白居易、春江詩「閉閣只聽朝暮鼓、一」空望在來船、驚聲誘引來、花下、神色留留坐「一」水邊「一」」
 【登樓】たかどのののぼる。盧僊詩「去、國三巴遠、一」萬里春「一」
 【登樓清嘯】樓に上りて清く嘯く。齊書、劉琨傳「嘗爲「一」胡騎所、圍重、城中窘迫無計、琨乃乘「一」月、一、賊聞之皆懷然長歎「一」
 【樓門】二階造りのもん。樓閣、樓觀。
 【樓閣】西域の國名。漢書、西域傳「鄯善國、本名「一」、王治「一」干尼城、去「一」關西千六百里「一」」
 【樓閣】敵を望むために設くる城のやぐら。後漢書、公孫瓚傳「一」千里「一」樓閣「一」

【榧】ロツ 榧に 通ず
 榧はろくろ、はねつるべ(井上汲水器)庚信詩「道險臥「一」榧「一」」
 【機】キ 圖
 ○からくり、しかけ「一」械「一」
 關「一」石弓のばね(弩牙)○かなめ(主要)○たくみ(巧)たくむ。○きざし(兆候)事の起るきっかけ。○氣運の變化、萬物の自然の變化「天」「一」莊、至樂「萬物皆出於「一」」○をり、しほ「一」會「一」乘「一」○あふ(會)○こまやか、かすか(密)「一」密「一」○いとぐち、はし(端緒)○あやふし(危)○星の名、北斗魁星の第三。○はたらき(活動)發動の由る所。大學「其「一」如此「一」○みち(道理)○はた、はたお

り「一」織「一」又其の具。
 【機】國家のはかりごと。賦は詳。薛登論「選舉「一」機「一」
 【機運】時のめぐりあはせ。魏書、申纂傳「一」可乘、實在「一」我日「一」時運、機運「一」
 【機要】かなめ、肝要。魏志「韜「一」古今于胸懷、包「一」道德之「一」」
 【機機】機道のさとりをひらくべき因縁。
 【失機】ておくれになる。機會をとりはづす。
 【見機】物ごとのきざしを知る。機會をさとの。易、繫辭「君子見「一」幾而作、不俟「一」終日「一」幾は機、事の兆の微、先づあらはるるもの。
 【機中】世の中うるさき機事をうちわすれて心しづかなる。李白詩「陶然共「一」
 【機巧】からくり、巧なるしかけによりて運轉する具。莊、天地「有「一」一者、必有「一」機事「一」」
 【機水雷】敵の船機をうちしづめる爲め海中にしづめ置く水雷。
 【機之心】巧にいつはるころ。淮南子「一」藏「一」于胸中、則純白不弊、神德不「一」機心「一」
 【機巧】機械のたくみ。後漢書、張衡傳「衡善「一」尤致「一」思于天文「一」機巧「一」からくりのしかけあるを

【機】後有「長較美人」樓門。
 【機鼓】やぐらに備へたるつづみ。曹伯啓詩「隔碣催「一」薄暮、一」辨「一」深更「一」」
 【機子】たかどの、二階家、子は助字。付、德詳詩、樓「一」十三房「一」
 【機車】ものみやぐらのつきたるくるま。左、宣十五「登諸「一」、使呼「一」宋人「一」而告之「一」」
 【機榭】たかどのと、うてなと、榭は屋根ある榭。德宗實錄「京師「一」之隙、創者、皆毀「一」」
 【機上】二階のうへ。史、平原君傳「美人居「一」」
 【機松】枝葉の笠の形をなせるまつ、かさまつ。抱朴子「一」、偃蓋松也「一」
 【機道】たかどのにて吹く筵の音。李洞詩「一聲歌裏玉「一」」
 【機前】たかどのの前なり。薛稷詩「野外樓初合、一」花正飛「一」
 【機船】二階づくりの大ふね。高、平準書、大修昆池、治「一」、高十餘丈、一將軍の名、漢の武帝、編僕を以て「一」將軍と爲し、南越を擊つ。○一軍は水軍。玉海「招「一」募習水善、波排舟便利之人「一」一軍「一」水師「一」」
 【機臺】たかどの。史、天官書「海旁臺氣、象「一」半參詩「一」重臺氣、邑里鐘「一」鼓人「一」」
 【機中】たかどののなか。羅隱詩

【雨過晚涼生、一」枕簟清「一」】
 【機臺】物見のやぐらと城上のひめがきと。宋書、桂陽王休範傳「表「一」治城池、修「一」二機臺「一」」
 【機殿】機と宮殿と。齊書、林邑國傳「起「一」城池、一」王服、天冠如「一」佛冠、身披「一」香縵路「一」」
 【上機】次條に同じ。白居易、春江詩「閉閣只聽朝暮鼓、一」空望在來船、驚聲誘引來、花下、神色留留坐「一」水邊「一」」
 【登機】たかどのののぼる。盧僊詩「去、國三巴遠、一」萬里春「一」
 【登機清嘯】機に上りて清く嘯く。齊書、劉琨傳「嘗爲「一」胡騎所、圍重、城中窘迫無計、琨乃乘「一」月、一、賊聞之皆懷然長歎「一」
 【機門】二階造りのもん。機閣、機觀。
 【機閣】西域の國名。漢書、西域傳「鄯善國、本名「一」、王治「一」干尼城、去「一」關西千六百里「一」」
 【機閣】敵を望むために設くる城のやぐら。後漢書、公孫瓚傳「一」千里「一」機閣「一」

【機】ロツ 機に 通ず
 機はろくろ、はねつるべ(井上汲水器)庚信詩「道險臥「一」機「一」」
 【機】キ 圖
 ○からくり、しかけ「一」械「一」
 關「一」石弓のばね(弩牙)○かなめ(主要)○たくみ(巧)たくむ。○きざし(兆候)事の起るきっかけ。○氣運の變化、萬物の自然の變化「天」「一」莊、至樂「萬物皆出於「一」」○をり、しほ「一」會「一」乘「一」○あふ(會)○こまやか、かすか(密)「一」密「一」○いとぐち、はし(端緒)○あやふし(危)○星の名、北斗魁星の第三。○はたらき(活動)發動の由る所。大學「其「一」如此「一」○みち(道理)○はた、はたお

【横】 〇すばやくと。魏書、
 魏書、性一好學、晝夜無倦、
 〇氣が利きて善く要
 領を得る。唐書、長孫無忌傳、應對
 一、一、
 【横】 〇すばやくと。魏書、
 魏書、性一好學、晝夜無倦、
 〇氣が利きて善く要
 領を得る。唐書、長孫無忌傳、應對
 一、一、

【横】 〇すばやくと。魏書、
 魏書、性一好學、晝夜無倦、
 〇氣が利きて善く要
 領を得る。唐書、長孫無忌傳、應對
 一、一、

【横】 〇すばやくと。魏書、
 魏書、性一好學、晝夜無倦、
 〇氣が利きて善く要
 領を得る。唐書、長孫無忌傳、應對
 一、一、

【横】 〇すばやくと。魏書、
 魏書、性一好學、晝夜無倦、
 〇氣が利きて善く要
 領を得る。唐書、長孫無忌傳、應對
 一、一、

【横】 〇すばやくと。魏書、
 魏書、性一好學、晝夜無倦、
 〇氣が利きて善く要
 領を得る。唐書、長孫無忌傳、應對
 一、一、

【横】 〇すばやくと。魏書、
 魏書、性一好學、晝夜無倦、
 〇氣が利きて善く要
 領を得る。唐書、長孫無忌傳、應對
 一、一、

【横】 〇すばやくと。魏書、
 魏書、性一好學、晝夜無倦、
 〇氣が利きて善く要
 領を得る。唐書、長孫無忌傳、應對
 一、一、

【横】 〇すばやくと。魏書、
 魏書、性一好學、晝夜無倦、
 〇氣が利きて善く要
 領を得る。唐書、長孫無忌傳、應對
 一、一、

【樅】 〇トウ 〇シヨウ 〇タウ 〇トウ

【樅】 〇花をつむぎて布とする一種の木の名「華」〇きざれ。〇敵陣を衝き破る戦車。〇とばりの柱(帳柱)〇はたざを(旗竿)〇ほばしら(帆樫)

【樅】 〇ハク 〇ボク 〇ハク 〇ボク

【樅】 〇さぢ(木素)木材の地質のままにて加工せざるもの。〇あらき、山から伐り出したままにてけづらざる材木。〇轉じて天真質素の義とす「質」

【樅】 〇すなほにしてまじめ。壹は專一。商子「民不淫」衆言「則民一」

的とせざるちみな學問。蘇軾詩「我家六男子、一一非時新」

【樅】 〇かざりけなくおろか。漢書「道里遠遠、難蔽」〇論衡「上世」

【樅】 〇かざりけなくつたなし。宋史「蘇軾傳、近世之人愈少、巧進之士益多」

【樅】 〇かざりけなくして實直。漢書「實素にしてばか正直、推は

風撻せざる義。漢書、周勃傳「少文」

【樅】 〇なまくら、器が説利ならず。漢書「兵刃」〇性質がすなほにしてぶし。蜀志「龐統傳」

【樅】 〇かざりけなくいやし。莊子「一之心、至今未去」

【樅】 〇かざりけなくいやし。山だしものにて行儀作法などの、いやしき義。〇樅野、樅部。

すれば破裂して数百の美しく赤粒子をあらはす(丹若)

【樅】 〇さくらの花の赤きを火に燻へていふ。馬祖常詩「圓紅」

【樅】 〇さくらの花。西陽雜俎「衡山祝融峯下法華寺、有石」

【樅】 〇さくらの花。元稹詩「紅羅襪存」

【樅】 〇ハク 〇ボク 〇ハク 〇ボク

【樅】 〇さぢ(木素)木材の地質のままにて加工せざるもの。〇あらき、山から伐り出したままにてけづらざる材木。〇轉じて天真質素の義とす「質」

【樅】 〇すなほにしてまじめ。壹は專一。商子「民不淫」衆言「則民一」

【樅】 〇かざりけなくつたなし。宋史「蘇軾傳、近世之人愈少、巧進之士益多」

【樅】 〇かざりけなくして實直。漢書「實素にしてばか正直、推は

【樅】 〇ハク 〇ボク 〇ハク 〇ボク

【樅】 〇さぢ(木素)木材の地質のままにて加工せざるもの。〇あらき、山から伐り出したままにてけづらざる材木。〇轉じて天真質素の義とす「質」

【樅】 〇すなほにしてまじめ。壹は專一。商子「民不淫」衆言「則民一」

【樅】 〇ハク 〇ボク 〇ハク 〇ボク

【樅】 〇さぢ(木素)木材の地質のままにて加工せざるもの。〇あらき、山から伐り出したままにてけづらざる材木。〇轉じて天真質素の義とす「質」

【樅】 〇すなほにしてまじめ。壹は專一。商子「民不淫」衆言「則民一」

【樅】 〇かざりけなくつたなし。宋史「蘇軾傳、近世之人愈少、巧進之士益多」

【樅】 〇さぢ(木素)木材の地質のままにて加工せざるもの。〇あらき、山から伐り出したままにてけづらざる材木。〇轉じて天真質素の義とす「質」

【樅】 〇すなほにしてまじめ。壹は專一。商子「民不淫」衆言「則民一」

【樅】 〇かざりけなくつたなし。宋史「蘇軾傳、近世之人愈少、巧進之士益多」

【樅】 〇かざりけなくして實直。漢書「實素にしてばか正直、推は

【樅】 〇ハク 〇ボク 〇ハク 〇ボク

【樅】 〇さぢ(木素)木材の地質のままにて加工せざるもの。〇あらき、山から伐り出したままにてけづらざる材木。〇轉じて天真質素の義とす「質」

【樅】 〇すなほにしてまじめ。壹は專一。商子「民不淫」衆言「則民一」

【檢致】 檢召に同じ。
【檢遺】 疾き貌。潘岳「策賦」。
【檢文】 急に兵などを徴し、又は同案を得んとする時に用ふる題状。檢書。

【檢】 ケン 園

○ふう、ふうする、ふういん、文書を封じて印を押す。「印」○とりしまる、しめくくる、ただす、制しとどめる。「制孟」、梁惠王「狗彘食人食、而不知」○たづねきはめる、とりしらべらる。「査」「查」○おなじ、ひとし(同等)「同」○のり、てほん(法式、法度)「式」○おこなひ(行儀)「行」○ためぎ。○かんがへる。○書物の上の題目(書帙之簽)けだひ。揚升庵集「卷帙之簽曰、又曰排」。

【檢遺】 遺しらべてとどめる。唐書、黃巢傳、督二道遺兵。○

【檢押】 押ししめる。漢書、一、旁關注、一、猶「遺」也。後漢書、仲長統傳、昌言曰、是婦女之一。○

【檢接】 接ししめた。た。魏書、甄琛傳、檢押。○

【檢印】 印を檢査したる體として押す。

【檢】 遺印、みとめ印。
【檢疫】 傳染病を豫防する爲め、旅客の診察消毒等を行ふ。
【檢閱】 〇しらべみる。〇檢察。〇陸海軍にて軍事上のことがらを實地檢査する。「一使」
【檢考】 〇しらべかんがへる。後漢書、陳寔傳、直流行、財入三公、上下食財、寔相一。〇檢校、檢上下、食財、寔相一。〇檢校、檢上下、食財、寔相一。
【檢校】 〇とりしらべかんがへる。王建詩「騎馬城西一花」。〇王僧孺の「一寺の統領にて法事を取り調べる役。〇昔、盲人の官名。
【檢革】 〇改める。唐書、崔瑛傳、天子思材望威烈者、一、其弊。○
【檢括】 〇しめくくりありてた。趙氏家訓「禁飲性無一」。〇
【檢擧】 〇しめくくりありてた。劉隆傳、昭下三州都、一、其事。〇檢考。
【檢先】 〇しめくくりありてた。唐書、元結傳、無今日一、而無命。〇
【檢覆】 〇覆せらる。〇覆す。唐書、元結傳、無今日一、而無命。〇
【檢】 〇覆せらる。〇覆す。唐書、元結傳、無今日一、而無命。〇

【檢】 此漢明帝、顯節陵中策文也、一果然。〇考、案驗。
【檢句】 〇罪状をとりしらべる。又、とりしらべ。唐書、蘇悅傳「訊覆一、而處事平」。
【檢査】 〇しらべかんがへる。
【檢】 〇しらべかんがへる。後漢書、百官志「什主二十家、一、五家、以相一」。〇監察。
【檢算】 〇運算の正否をしらべる算法。
【檢子】 〇文書のしたがき(總會)草稿。
【檢死】 〇死人の死體を役人がしらべらる。〇檢屍。
【檢字】 〇漢字字引の索引の一法、文字を總數數順に排列し、其の字の所屬の部首を示すもの。
【檢屍】 〇死に同じ。
【檢使】 〇檢法に同じ。
【檢事】 〇法廷の執行人の監督をなし、必要の場合には裁判上の意見をのべる司法行政官。〇檢察官。
【檢視】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇
【檢】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇

傳、此漢明帝、顯節陵中策文也、一果然。〇考、案驗。
【檢句】 〇罪状をとりしらべる。又、とりしらべ。唐書、蘇悅傳「訊覆一、而處事平」。
【檢査】 〇しらべかんがへる。
【檢】 〇しらべかんがへる。後漢書、百官志「什主二十家、一、五家、以相一」。〇監察。
【檢算】 〇運算の正否をしらべる算法。
【檢子】 〇文書のしたがき(總會)草稿。
【檢死】 〇死人の死體を役人がしらべらる。〇檢屍。
【檢字】 〇漢字字引の索引の一法、文字を總數數順に排列し、其の字の所屬の部首を示すもの。
【檢屍】 〇死に同じ。
【檢使】 〇檢法に同じ。
【檢事】 〇法廷の執行人の監督をなし、必要の場合には裁判上の意見をのべる司法行政官。〇檢察官。
【檢視】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇
【檢】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇

傳、此漢明帝、顯節陵中策文也、一果然。〇考、案驗。
【檢句】 〇罪状をとりしらべる。又、とりしらべ。唐書、蘇悅傳「訊覆一、而處事平」。
【檢査】 〇しらべかんがへる。
【檢】 〇しらべかんがへる。後漢書、百官志「什主二十家、一、五家、以相一」。〇監察。
【檢算】 〇運算の正否をしらべる算法。
【檢子】 〇文書のしたがき(總會)草稿。
【檢死】 〇死人の死體を役人がしらべらる。〇檢屍。
【檢字】 〇漢字字引の索引の一法、文字を總數數順に排列し、其の字の所屬の部首を示すもの。
【檢屍】 〇死に同じ。
【檢使】 〇檢法に同じ。
【檢事】 〇法廷の執行人の監督をなし、必要の場合には裁判上の意見をのべる司法行政官。〇檢察官。
【檢視】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇
【檢】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇

傳、此漢明帝、顯節陵中策文也、一果然。〇考、案驗。
【檢句】 〇罪状をとりしらべる。又、とりしらべ。唐書、蘇悅傳「訊覆一、而處事平」。
【檢査】 〇しらべかんがへる。
【檢】 〇しらべかんがへる。後漢書、百官志「什主二十家、一、五家、以相一」。〇監察。
【檢算】 〇運算の正否をしらべる算法。
【檢子】 〇文書のしたがき(總會)草稿。
【檢死】 〇死人の死體を役人がしらべらる。〇檢屍。
【檢字】 〇漢字字引の索引の一法、文字を總數數順に排列し、其の字の所屬の部首を示すもの。
【檢屍】 〇死に同じ。
【檢使】 〇檢法に同じ。
【檢事】 〇法廷の執行人の監督をなし、必要の場合には裁判上の意見をのべる司法行政官。〇檢察官。
【檢視】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇
【檢】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇

傳、此漢明帝、顯節陵中策文也、一果然。〇考、案驗。
【檢句】 〇罪状をとりしらべる。又、とりしらべ。唐書、蘇悅傳「訊覆一、而處事平」。
【檢査】 〇しらべかんがへる。
【檢】 〇しらべかんがへる。後漢書、百官志「什主二十家、一、五家、以相一」。〇監察。
【檢算】 〇運算の正否をしらべる算法。
【檢子】 〇文書のしたがき(總會)草稿。
【檢死】 〇死人の死體を役人がしらべらる。〇檢屍。
【檢字】 〇漢字字引の索引の一法、文字を總數數順に排列し、其の字の所屬の部首を示すもの。
【檢屍】 〇死に同じ。
【檢使】 〇檢法に同じ。
【檢事】 〇法廷の執行人の監督をなし、必要の場合には裁判上の意見をのべる司法行政官。〇檢察官。
【檢視】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇
【檢】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇

傳、此漢明帝、顯節陵中策文也、一果然。〇考、案驗。
【檢句】 〇罪状をとりしらべる。又、とりしらべ。唐書、蘇悅傳「訊覆一、而處事平」。
【檢査】 〇しらべかんがへる。
【檢】 〇しらべかんがへる。後漢書、百官志「什主二十家、一、五家、以相一」。〇監察。
【檢算】 〇運算の正否をしらべる算法。
【檢子】 〇文書のしたがき(總會)草稿。
【檢死】 〇死人の死體を役人がしらべらる。〇檢屍。
【檢字】 〇漢字字引の索引の一法、文字を總數數順に排列し、其の字の所屬の部首を示すもの。
【檢屍】 〇死に同じ。
【檢使】 〇檢法に同じ。
【檢事】 〇法廷の執行人の監督をなし、必要の場合には裁判上の意見をのべる司法行政官。〇檢察官。
【檢視】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇
【檢】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇

傳、此漢明帝、顯節陵中策文也、一果然。〇考、案驗。
【檢句】 〇罪状をとりしらべる。又、とりしらべ。唐書、蘇悅傳「訊覆一、而處事平」。
【檢査】 〇しらべかんがへる。
【檢】 〇しらべかんがへる。後漢書、百官志「什主二十家、一、五家、以相一」。〇監察。
【檢算】 〇運算の正否をしらべる算法。
【檢子】 〇文書のしたがき(總會)草稿。
【檢死】 〇死人の死體を役人がしらべらる。〇檢屍。
【檢字】 〇漢字字引の索引の一法、文字を總數數順に排列し、其の字の所屬の部首を示すもの。
【檢屍】 〇死に同じ。
【檢使】 〇檢法に同じ。
【檢事】 〇法廷の執行人の監督をなし、必要の場合には裁判上の意見をのべる司法行政官。〇檢察官。
【檢視】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇
【檢】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇

傳、此漢明帝、顯節陵中策文也、一果然。〇考、案驗。
【檢句】 〇罪状をとりしらべる。又、とりしらべ。唐書、蘇悅傳「訊覆一、而處事平」。
【檢査】 〇しらべかんがへる。
【檢】 〇しらべかんがへる。後漢書、百官志「什主二十家、一、五家、以相一」。〇監察。
【檢算】 〇運算の正否をしらべる算法。
【檢子】 〇文書のしたがき(總會)草稿。
【檢死】 〇死人の死體を役人がしらべらる。〇檢屍。
【檢字】 〇漢字字引の索引の一法、文字を總數數順に排列し、其の字の所屬の部首を示すもの。
【檢屍】 〇死に同じ。
【檢使】 〇檢法に同じ。
【檢事】 〇法廷の執行人の監督をなし、必要の場合には裁判上の意見をのべる司法行政官。〇檢察官。
【檢視】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇
【檢】 〇しらべみる。後漢書、杜根傳「使一人」。〇

○木 部 (十三畫)

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

【檝】 楫(木部九畫)に同じ。
【檝】 かちとり。孟浩然詩「放瀆」。

にして極めて小さく、枝は糸の如くにして下垂し、五六月頃、淡紅紫總狀の小花を著く。二三春柳。

【葉】 ① ハク・ビク ② 俗に葉に作る

①きはだ(黄木)寒地に産する番木の一、葉は漆に似、夏、黄花开き、五稜ある實を結ぶ、樹皮は苦くして薬用とし、又、黄色の染料とす「黄」の「苦」

①たらひ(葉)

【櫛】 櫛(前條)に同じ。

【櫛】 櫛(木部十二畫)に同じ。

【櫛】 タイ ①木の名。○石を推して高きより下す。櫛。

【櫛】 イ ①支

【櫛】 櫛は木の長き貌。又正しからざる貌。

【櫛】 エン ①山桑の一種、柘のやまぐは。

属、點狀の斑があるもの「桑」

【櫛】 櫛(木部十一畫)に同じ。

【櫛】 イウ ①又、後に

○田を摩する器。○又其の器にて地面をならす。○鋸の柄。○塊を打ちくだく槌

【櫛】 エン ①

【櫛】 カン ①

○てすり、おぼしま(欄干)「欄」折「れんじ(欄)れんじ」

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 櫛(木部十二畫)に同じ。

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

○木のきりかぶ(断木)○おろか、無知の貌。①「著」はめでたきくさ(瑞草)の名。史、龜策傳「上有著下有伏龜」

【櫛】 櫛(木部十二畫)に同じ。

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

千時、海邊津史、舟迎

【櫛】 櫛(木部十二畫)に同じ。

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 櫛(木部十一畫)に同じ。

【櫛】 イウ ①又、後に

○田を摩する器。○又其の器にて地面をならす。○鋸の柄。○塊を打ちくだく槌

【櫛】 エン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 櫛(木部十二畫)に同じ。

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 櫛(木部十二畫)に同じ。

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

【櫛】 カン ①

楨は楨。韓非、外傳「楚人有買其珠於郢者、爲三木蘭之楨、薰桂椒之楨、擬以三珠玉、飾以玫瑰、以三翡翠、飾人買、其價一而還、其珠、此可謂善買楨矣、未可謂善賣一珠也」

【楨】

○さかだる。雲雷の形を彫りつけたる酒樽。『魯』。○劍の頭の飾、劍の頭を玉にて飾り、其の上に山形の木ほりの飾をはめしもの。漢書、焦不疑傳「帶一具劍」

【櫛】

○櫛は木の名。櫛(木部九畫)を見よ。○くもりん(花欄)は熱地に産する喬木の、材堅く紫紅色にして、美しくしき花文あり、器具を造るに良し。『華』。又、果樹の一、ほけに似、秋、黄色にして酸味ある果を結ぶ。『撰』。

【櫛】

ライ

○ふぢ(藤) ○かつら(葛) 葛。 〇レキ

【櫟】

○くぬぎ(桐) 桐(木部)とんぐりの木、落葉喬木の、樹は栗に似、樹皮あらく、われ目を生じ、秋、圓き果即ちどんぐりを結ぶ、材は薪炭と爲すに適す。○やくにたたぬ木(散木)不才無用の人(散人)に喩ふ。『樗』。木部十一畫)を見よ。○楨。○楨に通ず、ならず、こする、かきならず。○陽は縣名、雍州に在り。

【櫟】

○楨。楨は木の名。楨(木部九畫)を見よ。○くもりん(花欄)は熱地に産する喬木の、材堅く紫紅色にして、美しくしき花文あり、器具を造るに良し。『華』。又、果樹の一、ほけに似、秋、黄色にして酸味ある果を結ぶ。『撰』。

【櫟】

いほた、女貞に似たる木、幹より油又は蠟を取る。水楸樹。

【櫟】

○おほだて(大盾) 大形の楯。楯。○ものみやぐら(城上望樓) 屋根のなき者。望。楯。○ろ。船を進ましむる具。船尾に在るは楯、旁に在るは「柔」。楯。楯。楯。○やぐら。城の壁や門の上に設けたるもの。○木を組み上げて高く構へたる棧敷。大鼓。○炬燵の上に覆ふわ。

【櫟】

○のき「飛」。楯。○みぎり(初) ○わたの、ほそどの(廊) 楚辭「曲星歩」。歩は歩

して通ふべき廊。歩廊。

【櫟】

いぬんじ。櫟。

【櫟】

○ひこばえ、木のきりかぶより生ずる芽。櫟。○一旦絶えたる物事の復び發生するもの。

【櫟】

いちひ、かし、いちひかし、常緑喬木の、葉は栗に似、春、花を著け、椎の實に似たる果を結ぶ、材堅く用途多し。

楨は楨。韓非、外傳「楚人有買其珠於郢者、爲三木蘭之楨、薰桂椒之楨、擬以三珠玉、飾以玫瑰、以三翡翠、飾人買、其價一而還、其珠、此可謂善買楨矣、未可謂善賣一珠也」

【楨】

○さかだる。雲雷の形を彫りつけたる酒樽。『魯』。○劍の頭の飾、劍の頭を玉にて飾り、其の上に山形の木ほりの飾をはめしもの。漢書、焦不疑傳「帶一具劍」

【櫛】

○櫛は木の名。櫛(木部九畫)を見よ。○くもりん(花欄)は熱地に産する喬木の、材堅く紫紅色にして、美しくしき花文あり、器具を造るに良し。『華』。又、果樹の一、ほけに似、秋、黄色にして酸味ある果を結ぶ。『撰』。

【櫛】

ライ

○ふぢ(藤) ○かつら(葛) 葛。 〇レキ

【櫟】

○くぬぎ(桐) 桐(木部)とんぐりの木、落葉喬木の、樹は栗に似、樹皮あらく、われ目を生じ、秋、圓き果即ちどんぐりを結ぶ、材は薪炭と爲すに適す。○やくにたたぬ木(散木)不才無用の人(散人)に喩ふ。『樗』。木部十一畫)を見よ。○楨。○楨に通ず、ならず、こする、かきならず。○陽は縣名、雍州に在り。

【櫟】

○楨。楨は木の名。楨(木部九畫)を見よ。○くもりん(花欄)は熱地に産する喬木の、材堅く紫紅色にして、美しくしき花文あり、器具を造るに良し。『華』。又、果樹の一、ほけに似、秋、黄色にして酸味ある果を結ぶ。『撰』。

【櫟】

いほた、女貞に似たる木、幹より油又は蠟を取る。水楸樹。

【櫟】

○おほだて(大盾) 大形の楯。楯。○ものみやぐら(城上望樓) 屋根のなき者。望。楯。○ろ。船を進ましむる具。船尾に在るは楯、旁に在るは「柔」。楯。楯。楯。○やぐら。城の壁や門の上に設けたるもの。○木を組み上げて高く構へたる棧敷。大鼓。○炬燵の上に覆ふわ。

【櫟】

○のき「飛」。楯。○みぎり(初) ○わたの、ほそどの(廊) 楚辭「曲星歩」。歩は歩

して通ふべき廊。歩廊。

【櫟】

いぬんじ。櫟。

【櫟】

○ひこばえ、木のきりかぶより生ずる芽。櫟。○一旦絶えたる物事の復び發生するもの。

【櫟】

いちひ、かし、いちひかし、常緑喬木の、葉は栗に似、春、花を著け、椎の實に似たる果を結ぶ、材堅く用途多し。

【櫟】

楨は楨。韓非、外傳「楚人有買其珠於郢者、爲三木蘭之楨、薰桂椒之楨、擬以三珠玉、飾以玫瑰、以三翡翠、飾人買、其價一而還、其珠、此可謂善買楨矣、未可謂善賣一珠也」

【櫟】

○楨は木の名。楨(木部九畫)を見よ。○くもりん(花欄)は熱地に産する喬木の、材堅く紫紅色にして、美しくしき花文あり、器具を造るに良し。『華』。又、果樹の一、ほけに似、秋、黄色にして酸味ある果を結ぶ。『撰』。

【櫟】

○楨は木の名。楨(木部九畫)を見よ。○くもりん(花欄)は熱地に産する喬木の、材堅く紫紅色にして、美しくしき花文あり、器具を造るに良し。『華』。又、果樹の一、ほけに似、秋、黄色にして酸味ある果を結ぶ。『撰』。

【櫟】

楨は楨。韓非、外傳「楚人有買其珠於郢者、爲三木蘭之楨、薰桂椒之楨、擬以三珠玉、飾以玫瑰、以三翡翠、飾人買、其價一而還、其珠、此可謂善買楨矣、未可謂善賣一珠也」

【鬱】鬱部十九畫の俗字。

廿四畫

【標】標(木部十九畫)に同じ。

欠部

【欠】ケン 欠部 俗に缺の時字として用ふるは誤

〇あくび、氣が倦みし時に自然に出る大いき。あくびする「伸」〇不足する、かける「欠」〇「虧」〇かり、おひめ(負債)意納(納税をおこたる)「連」蘇洵、論積欠狀「自、小民已上、大率皆有積欠」(俗部四畫)の條を見よ。

【次】シ 次部 通音

〇つぎ、第二番目、又つぎの番、又一段劣りし等級「一席」左、襄二四「大上有立德、其次有立功、其次有立言」〇つぎの、〇つぎ、つづく。〇ついで「一序」ついで、順序をつける「一第」〇たび(度)度數、回數をあらはす語「第三内閣」〇ならび、ならぶ。〇とどまる(止)〇とどむ。〇とまる(至)たす、とどく。〇とまる、やどる(宿)軍隊の宿營にいふ。書、泰誓「王、于河朔、〇やどや、はたごや、旅」〇ばし、とどろ(所、處、位置)〇星のやどり(星座)〇もや(倚廬)〇しづくば、ものみ。〇うち、なか(中)「胸」〇あひだ(間)〇造一は急遽の貌。草次。

【次】シ 次部 通音

食卒。〇一旦は進み難き貌。〇次超。二に从ひ、シに从はず。【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。

【次】シ 次部 通音

【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。

【欣】シ 欠部 通音

【欣】シ 欠部 通音 二に从ひ、シに从はず。【欣】シ 欠部 通音 二に从ひ、シに从はず。【欣】シ 欠部 通音 二に从ひ、シに从はず。

【次】シ 次部 通音

【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。

【次】シ 次部 通音

【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。

【次】シ 次部 通音

【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。【次】シ 次部 通音 二に从ひ、シに从はず。

【歎】柳宗元詩「一摩山水結」一解に、船を行く舟の聲。

【歎】

○むせぶ、むせび泣く。○すすり、すすりなく、泣きたる餘聲。「歎」一〇なげく、かなしむ(悲)〇おそれる貌。

【歎】

【歎】^{ナツ} すすりなき。韓詩外傳「五雷」就之。【歎】^{ナツ} 仰長歎以「一」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 歎(欠部八畫)の俗字。

【歎】

○ほつす。〇ねがふ(願)のぞむ(望)「願」一〇望「願」〇食りをしむ。又、其の心「貪」一利一論、憲問「克伐怨一不行焉、可、以爲仁矣」願ひ求める。〇をしむ、あひす、めづ(愛)又、其の心「情」一淫「食」一「寡」一。〇七情の一。禮、禮運「何謂入情、喜怒哀懼愛惡、〇」としとやか、すなほ、婉順なる貌。〇このむ(好)〇將に然らんとするの辭「天」一明「天」一雨」。

【歎】^{ナツ} 有三有の一、歎界をいふ。釋氏要覽「婆娑論云、一一、二色有、三無色有」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 以て充たされたる世界。大藏法數「歎有四種、一者情歎、二者色歎、三者食歎、四者疑歎、下極阿鼻地獄、上至第六他化天、男女相參多諸染歎、故名「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 情歎の人を隔るに喩ふ。溫子昇文「深論「一」」梁武帝文「度」

【歎】

【歎】^{ナツ} 欲望の熱情を火に譬へていふ。

【歎】

【歎】^{ナツ} 不可得「一」私欲を抑へ制すべきをいふ。從は縱、曲禮「教不可長、一」教は教。

【歎】^{ナツ} 俗に通ず、用するは非

【歎】

【歎】^{ナツ} 歎は歎美の辭、あゝ。猗與。〇あきたらざる貌(不満足)〇あな(坑)左、襄十六「用牲」盟約の時の犠牲を穴に埋める。〇歎ふる貌。

【歎】

【歎】^{ナツ} 志を得ざるうらみ。楚辭「志一而不得」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 心に満足せざる貌。孟、盡心「如其自視「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇あざむく。〇うそ、いつはり(詐)「詐」〇自ら其の心を味ます、悪事をして恥と思はぬ。大學「毋「自」也」〇あな(護)〇しのぐ(護)。

【歎】^{ナツ} だます、あざむきたぶらかす。韓愈詩「養將長三彈射、斥逐恣「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} だます、あざむきたぶらかす。沈遷詩「甘言事「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 多不得二分明「一」詐歎。

【歎】

【歎】^{ナツ} 推心肝「一」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳、或「一」之者と〇しのきたます、歎は隱。李胡文「見陵」於人「爲「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇このむ(好)〇將に然らんとするの辭「天」一明「天」一雨」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 歎(欠部八畫)の俗字。

【歎】

【歎】^{ナツ} 歎(欠部八畫)の俗字。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳、或「一」之者と〇しのきたます、歎は隱。李胡文「見陵」於人「爲「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳、或「一」之者と〇しのきたます、歎は隱。李胡文「見陵」於人「爲「一」」。

【歎】^{ナツ} 〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳、或「一」之者と〇しのきたます、歎は隱。李胡文「見陵」於人「爲「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳、或「一」之者と〇しのきたます、歎は隱。李胡文「見陵」於人「爲「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳、或「一」之者と〇しのきたます、歎は隱。李胡文「見陵」於人「爲「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳、或「一」之者と〇しのきたます、歎は隱。李胡文「見陵」於人「爲「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳、或「一」之者と〇しのきたます、歎は隱。李胡文「見陵」於人「爲「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳、或「一」之者と〇しのきたます、歎は隱。李胡文「見陵」於人「爲「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳、或「一」之者と〇しのきたます、歎は隱。李胡文「見陵」於人「爲「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳、或「一」之者と〇しのきたます、歎は隱。李胡文「見陵」於人「爲「一」」。

【歎】

【歎】^{ナツ} 〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳、或「一」之者と〇しのきたます、歎は隱。李胡文「見陵」於人「爲「一」」。

【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮

【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮

【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮

【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮
【歡樂】やよるこびと、さかえと。草
應物詩「賢愚共ニ」二歡樂榮

止部

〇とむ、とめる(留)論、微子
「子路宿」ととまる。〇やむ
(已)論、子罕「喜」也、進吾進
也「やすむ(休息)〇心の安ん

する所。心をおちつける。大學
「在」於至善。〇をる(處)〇
しつか(靜)動かぬ、静まる。
禮、玉藻「口容」〇いたる
(至)臨む。〇ね、ねもと(根幹)
〇あし(足)漢書「當新」左
者、管五百「趾」。〇とらはれ
る。とりこにする。左、僖十五
「駘秦伯將」之「〇師營に行
く。いくさにく。〇かたちづ
くり、たちふるまひ「容」
「畢」(動)詩、鄭風「人而無
」〇あつまる。あつむ(集)〇
せず、おこなはず、為さず。〇
さしとめる、禁ず、制す「禁」〇
「中」(停)「諫」(一)「誘」〇
をほる(畢)〇つく(盡)〇やど
る(宿)〇のり(則)〇枕を敷つ
推つ〇ただ、ただに(音)わづ
かに。莊、天運「一可以一宿以
不可久處」〇無意味の助字。
詩、周頌「百室盈一、婦子寧」
詩、周頌「止。唯。只。但。徒。第。會。
翅。直の別は唯(口部八畫)の條を
見よ。

〇止。留。駐。停。過。返。積。〇止は
やめとどまる意。止者、必至、是而
不還之謂と註す。〇留は去に對
す、其の場にゆるりといふ。居るな
り、逗留。留連。留客などと用ふ。

羽紀「漢王乃迎項王、至陽夏南」
一「一」
【止戈】しごをこむ、戦争をやめ
る義。左傳「夫文、一爲武」止戈
の二字を合すれば武の字となるを
いふ。吳志、孫皓傳「一興仁」
【止宿】しゆく、あやまちをとどむ。兩子
「斷人之足、斷人之面、非求傷民
也、以禁姦一也」
【止觀】しくわん、圓多くの妄念を制止め
て、萬有の眞理を觀じよとる。
【止畏】しび、とどまる。長は易の長卦。
一陽が二陰の上において、止の義
あるに由る。李程蒙象賦「胡一
而不前」止畏也。
【止邪】しじや、よこしまなる心をよせ
とどむ。史、酷吏傳「禁姦一」
【止酒】ししゆ、飲酒をやむ、禁酒する。高
誘詩「潤明方一、王榮亦登樓」
陸游詩「我獨潤明一」
【止淫】しひん、とどまる。漢書、王
尊傳「因一」
【止水】しすい、〇たまり水。莊、德充符「仲
尼曰、人莫之能三于流水、而鑑三子
一。〇轉じて心の靜かにして動か
ざるに喩ふ。
【止息】ししき、とどまりいこふ、やむ。史。
孟嘗君傳「未知所三也」二息
止、休息。
【止畜】ししゆく、とどむ。易、程傳「六五居三
君位、三天下之邪惡」
【止頓】しどん、とどまる。軍隊の一所にと

とどまる義、頓は止會。吳志、潘璋傳
「一便立三軍市」
【止勝】ししやう、そしりをとどむ。徐幹、中
論「語稱、教、寒、寒、莫、如、重、裘、一、
莫、如、修、身」
【止暴】しひやく、亂暴の者をおさへとどむ。
陳後主文「惟刑一、惟德成物」
【止泊】しはく、とどまる。又、おちつき休む。
陶淵詩「前逢魯叢許、未知三」
【止陣】しちん、みるまをとどむ。天子の
一所に軍をとどむるをいふ。謝朓
文「烏仁園下馬一」
【止歩】しふ、足をとどめる。沈約文「一
凝思、空可屈念」
【止展】しけん、とどまる。詩經「宗周既滅、
靡所三」二展止。
【止可】しこ、風月。三三三ただ風流の
ことのみを語るべし、名利の念な
き義。南史、徐勉傳「吏部尚書三居三
選官、官與三門人一夜集、客有三處、
求三廢事官、勉正、色云、今夕、
不三及三公事、時人服三其無私」

【歸沐】休暇を得て家にかへり髪をあらふ。劉禹錫詩「五日思歸沐」。
 【歸與】かへることを促す語。
 【歸來】かへりきたる。○かへりきたれ、かへれ。宋玉招魂「歸來」。○不可久「久」。

歹部

【歹】ガツ 又、少、白に作る。

【歹】肉をけづりたるあとのほね(殘骨)の歹。○あし。好の反對。集要「悖德逆行曰歹」。

夕

【夕】夕(前條)に同じ。

朽

【朽】キヤ 腐。くつ、くさる(腐)列、湯問「其肉」の朽。

死

【死】シ 死ぬ。○死ぬ、生命を亡ぶ「亡」。「戦」「天」「餓」「病」「崩壊」卒などに対して身分の無き人

の死。曲禮「庶人曰死」。○はつ(果)つく(盡)。「風」をはる(終)活動をやめる。孟、告子「於安樂」○ころす(殺)史、高祖紀「殺人者」○かる(草)枯。草木の生氣が盡きる「枯」。○草。○ほろぶ(亡)○ちる(散)○俗に活動せざる者をいふ「灰」○燈火が消える。陸游詩「破驛夢回燈欲」。○守。はしにものぐるひになりて守る。○地は極めて危き場所。
 【死】或重於泰山。人の生命は場合によりては最も貴重すべき。司馬遷「報任安書」人固有「死」。或輕於鴻毛。用之所趣異也。
 【死友】○死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死肉(骨)の死。人の大恩を受くること、已に死して又生き、白骨再び肉つく、如きをいふ。左、襄二「平子曰、荀使軍如得改事君、所謂一也」。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

子之勇也。
 【決死】決死。次條に同じ。
 【必死】必死。必死のちがけになる、死を決する。漢書、朱博傳「對曰、必死」。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

の心の無欲にして名利に冷かなるに喩ふ。莊、齊物「形固可使如槁木、而心固可使如死灰乎」。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

て生前の怨をはらす(史、伍子胥傳)○轉じて死人の言論行爲を攻撃するにもいふ。
 【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

之以爲戰。一。
 【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【死】死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲一」。後漢書「趙岐傳」出行乃得「死」。○死すに死せし友。齊家實業「賈」○者之善義、比負「生友」者、爲「九菴」交「友者」戒之「死」友。

【残照】残照。春のきえのこりのゆき。杜... 時任「好風」郭伯燕詩「一塞梅味吐花」

【残喘】残喘のこりのいき。死にかかれ... 宋无詩「草繩穿鼻紫棠...」

【残蟬】秋の末まで鳴いてゐるせみ。【殘蠅】...

【殘響】響未詩「古甍積雨昏...」

【殘柳】柳のこりのせみ。周伯時詩「...

【殘酒】酒のこりのしづく。虞世南詩「...

【殘冬】冬のはり。吳寛詩「晏...」

【殘燧】燧のこりのともしび。【殘燈】...

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

【殘燄】燄のこりのあつさ。白居易詩「...」

○あつし(厚)〇たすく(輔)助力する。詩、小雅「天子是」〇あはす(并)〇厚一は胡人の革帯の鈎也。

【毗倚】たよる。晋書、王祥傳、武帝詔曰、太保元老高行、朕所一以履、政道一者也。

【毗益】たすけて益する。後漢書、劉聖公傳、望其一二萬分、異化致理、一補益、毗補。

【毗贊】たすける。贊は助。晋書、荀勗傳、一二期朝政、一二期贊、實贊。

【毗補】たすけおぎなふ。後漢書、馬后傳、言及政事、多所一二期一二期毗益。

【毗翼】助ける。翼は助。晋書、文帝紀、一二期前人、仍斷一二期大政、一二期輔佐。

【毘】毗(前條)に同じ。

【毘沙門】毘沙門。〇毘多聞と譯す。天王の一、北方を護り、財寶を掌る。法華經科註、此云多聞、居須彌北、即護世四天王之一也。〇毘多聞天。〇毘七福神の一。

【毘首羯磨】毘首。〇天然の工匠、善く佛像を刻む。今、佛として祭る。正理論、音云、毘首羯磨、此云三種工業、四土工巧者、多祭此天。

【毖】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

〇つしむ(慎)〇懲一詩、周頌「予其懲而」後患〇〇つかる、いたはる(勞)〇泉の流れる貌。詩、邶風「彼泉水」

【兔】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

〇毛色のまじりけなき性。〇竹の一種。〇物事の煩碎に喩ふ。一舉細故。〇圖稻麥などのみのり。一二期作。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【毛】
〇歌と鳥と。〇翎毛。

【民設】人民の力にて設置する。私設。○人民が適任者をえらびだす。官選の對「一職員」。

【民俗】人民のならはし。禮記「君民者、章好以示之」。○民風。【民則】人民の從ひ守るべき法。書經「弘敷五典、式和二民」。【民族】人類の種族。【民衆】たみの害をなすもの。孟、告子「今之所謂真臣、古之所謂一也」。【民間】○地方人民が團結訓練して盜賊を防ぐ組合。○外國の一定の區域に住する本國人民を以て組織する法人團。【民度】人民の智識又は貧富の程度。【民德】たみの德義。論、學而、曾子曰「慎終追遠、一歸厚矣」。【民望】○たみのねがひ、人民の希望。漢書「陳勝傳、週詐稱公子扶蘇、項燕、從也」。○民の仰ぎ望む義。曹植、七啓「一草、我澤如春」。○人民のてほん。孟、離婁「寇至則先去以爲」。【民義】たみのくらしのしむ。漢書「宋史、魏了翁傳、載三吏、趙二」。【民部】官名、人事戶籍の事などを掌る。後周に始り、隋は度支を改めて一と爲し、唐は一を改めて戶部と爲す(通典)北魏書、程駿傳「祖父羅呂光、一尚書」。【民部省】○王朝時代の八省の一、土地、人民、租稅等のことを掌る。【民風】人民のならはし。禮記「命、大師、陳詩、以觀二民」。【民俗】凡軍有、四、四二。【民表】たみの則るてほん、民の節表。漢書「文帝紀、廉吏、民之表也」。【民母】父の正妻。漢書「一之子、皆叔、皆之」。【民約】國家は人民の契約によりて成るといふ説。佛蘭西のルツソーの首唱。【民力】たみのちから。孟、梁惠王「文王以二爲、二」。【民力休養】人民の勞をいたはむ。租稅をゆるして其の力をいこひ養はす。【科民】人民の口數を料る。周語「二于太原」。【視民如傷】たみのちかか民を恤む、か愛するをいふ。孟、離婁「文王、一左傳、國之興也」。【勞民】人民をいたはりつかふ。論、子張「君子信而後勞、其民」。【民草】○人民、あをひとぐさ。○民庶、蒼生、黔首。【與民同樂】王者は人民と樂を共同にする。孟、梁惠王「此無也」。○今王與百姓同樂、則王矣。【民之司命】五穀をいふ、命のつかさの義。管子「五穀食米」。【樂民之樂】○民亦樂二其樂。【樂民亦愛二其愛】○與民同樂。【樂民之愛】○與民同樂。【樂民之愛】○與民同樂。【樂民之愛】○與民同樂。【樂民之愛】○與民同樂。

【氣】キ

【氣】(氣部六畫)に同じ。○雲の氣。

【氣】フン

○氣、吉凶の先づ見ゆるる氣。【祥】「妖」○あしき(惡氣)左、襄二七「楚一甚惡」凶をさしひ(凶事)○氣は氣の盛んなる貌。

【氣】フン

○氣、吉凶の先づ見ゆるる氣。【祥】「妖」○あしき(惡氣)左、襄二七「楚一甚惡」凶をさしひ(凶事)○氣は氣の盛んなる貌。

【氣】キ

【氣】(氣部六畫)に同じ。○雲の氣。

【氣】フン

○氣、吉凶の先づ見ゆるる氣。【祥】「妖」○あしき(惡氣)左、襄二七「楚一甚惡」凶をさしひ(凶事)○氣は氣の盛んなる貌。

気部

気部

【氣】キ

【氣】(氣部六畫)に同じ。○雲の氣。

【氣】フン

○氣、吉凶の先づ見ゆるる氣。【祥】「妖」○あしき(惡氣)左、襄二七「楚一甚惡」凶をさしひ(凶事)○氣は氣の盛んなる貌。

【氣】キ

【氣】(氣部六畫)に同じ。○雲の氣。

【氣】フン

○氣、吉凶の先づ見ゆるる氣。【祥】「妖」○あしき(惡氣)左、襄二七「楚一甚惡」凶をさしひ(凶事)○氣は氣の盛んなる貌。

の現象、一、蓋。范仲淹、岳陽樓記「朝暉夕陰、一萬千」。氣象、蓋、一、蓋。氣象を觀測するものみ蓋。二、天文蓋。

【氣沮】^シ 氣がはばむ。梅堯臣詩「一心衰計欲睡、夢想先到積滯前」。

【氣性】^シ いかでか。きま。〇氣質。氣味。〇おもむき。けはひ。蘇軾詩「平生未省爲人忙、貧賤安閑一長」。

【氣成岩】^シ 支那の黃土の如く、風化作用によりて生じたる厚き地層。【氣絕】^シ いきがたえる。絶息する。めをまはす。晉書、荀彧傳「被三四節」。

【氣節】^シ 〇けだかくして持かたし。意氣と節操と。史、汲黯傳「黯好學游俠、任氣」。

【氣血】^シ 〇血液のこま。山海經、注「木未散類也、生水之阿可食」。水鳥類、生水之阿可食。【水鳥】^シ 〇水鳥。山海經、注「木未散類也、生水之阿可食」。水鳥類、生水之阿可食。

【水鳥】^シ 〇水鳥。山海經、注「木未散類也、生水之阿可食」。水鳥類、生水之阿可食。【水鳥】^シ 〇水鳥。山海經、注「木未散類也、生水之阿可食」。水鳥類、生水之阿可食。

【氣】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。

【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。

【水】^シ スキ 〇みづ、酸素と水素との化合物して成る液體。〇かは(河川)「湘」。「漢」。「易」。「おほみづ」(洪水)其の災害。春秋、桓元「秋大」。〇北の方位。〇横にたひらか「平」。「準」。「おうるほふ」(滿)〇水を汲む、みづ仕事「薪」〇星の名、八大行星の、太陽系の第一位に在り。〇明は祭祀に供する水。〇一銀は礦物の一種、一名汞。〇風は陰陽家の語、山脈水流を以て基地の吉凶に關係ありと爲す説。

【水】^シ 〇水鳥のくま。山海經、注「木未散類也、生水之阿可食」。水鳥類、生水之阿可食。【水鳥】^シ 〇水鳥。山海經、注「木未散類也、生水之阿可食」。水鳥類、生水之阿可食。【水鳥】^シ 〇水鳥。山海經、注「木未散類也、生水之阿可食」。水鳥類、生水之阿可食。

【水鳥】^シ 〇水鳥。山海經、注「木未散類也、生水之阿可食」。水鳥類、生水之阿可食。【水鳥】^シ 〇水鳥。山海經、注「木未散類也、生水之阿可食」。水鳥類、生水之阿可食。【水鳥】^シ 〇水鳥。山海經、注「木未散類也、生水之阿可食」。水鳥類、生水之阿可食。【水鳥】^シ 〇水鳥。山海經、注「木未散類也、生水之阿可食」。水鳥類、生水之阿可食。

【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。

【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。

【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。

【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。

【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。

【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。

【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。

【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。【水瀆】^シ 〇みづぎは。水瀆。水瀆。〇圓形を用ひず水瀆にしたる湖。

可田者爲沙
沙紅 蝦之異名「博物志」
沙紅 蝦之異名「博物志」
細長き赤色の魚、釣魚の餌とす。

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

○水部 (四畫)

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

○水部 (四畫)

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む
沙洲 洲の異名、海邊の泥中に棲む

安可ニ以没没求ヲ活哉」
 【没没】^{マツ} ○ほろぶ。魏書、世宗紀、「
 一者、復二一房田租」○おちいる。
 唐律雜文、「一、謂三中華人一ニ一審
 中」
 【没利】^{マツ} 利益をうしなふ。魏國策
 「一ニ一于前、而馬二急于後也」
 利。
 【没了】^{マツ} 無くなつてしまふ。水滸傳
 櫻子、驚得下官、魂魂一」

○そそぐ(灌溉)○水をかけて
 手を洗ふ。○人の心につぎこ
 みて教へ導く。書、說命、「一朕
 心二〇盛んなり。〇みめよし
 (壯)〇やはらか、木の葉が
 わかわか(柔)詩、小雅、其葉
 有「〇土地肥えて穀物よく
 みのる。又、其の地。〇一度、
 藥品の名、英語の音譯。
 四畫)の條を見よ。

【沃日】^{マツ} 日にそそぐ、大海の形容。
 水華、海賦、濤雲一」
 【沃壤】^{マツ} こえたるとち。潘岳賦
 「耕二東阜之一一、輸二黍稷之餘
 稅」
 【沃土】^{マツ} 沃地。
 【沃若】^{マツ} 〇あざやかにしてつやあ
 る貌。若は助辭。詩、小雅、我馬維
 駿、六轡一〇、みづみづしくして
 つやあり。詩經、爾其葉一」
 【沃饒】^{マツ} こえて産物多し。王傑詩
 「軍中多二一一人馬皆溢肥」
 【沃野】^{マツ} 地のこえたると、やせたる
 と。宋孝武帝、梨花贊、「一異、
 舒條珠時」
 【沃洗】^{マツ} 〇さかづきをそそぎあらふ。
 儀禮、主人坐取、爵、一者西北面
 【沃灌】^{マツ} 〇そそぎあらふ。梅堯臣詩
 「田野逢漁父、蒿萊思二一」
 【沃晴】^{マツ} こえたるとち。肥沃なる
 島。唐書、王時、陝西開二、召南
 分一」
 【沃田】^{マツ} 肥えたる田地。論衡、「以二盤
 石一爲二一」
 【沃土】^{マツ} こえたるとち。後漢書、
 一之民、不材、淫也」
 【沃美】^{マツ} 土こえてよし。後漢書、
 南夷傳、土地一、宜二五穀繁榮一」
 【沃民】^{マツ} 沃土に住むたみ。山海經
 「西有沃沃之國、一」
 【沃火】^{マツ} 火に水をそそぎて消す。漢
 書、外戚傳、史卒以水一」
 【沃野千里】^{マツ} 肥えたる原野が廣く
 千里もつづく。史、留侯世家、「夫關
 中左二穀道、右三龍蜀、一」
 【沃腴】^{マツ} 土地こゆ。華陽國志、土地
 一」
 【沃若】^{マツ} さかんにしてうつくしき
 貌。詩、爾其葉沃若」
 【沃若】^{マツ} 田地をこやすきながあ
 め。梅堯臣詩、「赤地有二、野
 無一」
 【沃化銀】^{マツ} 沃素と銀との化合物。
 富貴術に用ふ。
 【沃素】^{マツ} 農業に似たる一元素。沃
 度。
 【沃度加里】^{マツ} 沃度とカリウムとの
 化合物。富貴術又は富貴術に用ふ。沃
 沃利・沃化カリウム。
 【沃度丁】^{マツ} 沃度のアルコール溶
 液。防腐劑・解熱薬として醫療に用
 ふ。英語、ヨチニウムをあて字。
 【沃度仿】^{マツ} 沃度より製せし黄色
 の結晶粉末。防腐劑に用ふ。

【汪】^{マツ} 〇水がふかくひろし(深廣)○
 大なる貌。○濁りたる池。
 【汪罔】^{マツ} 汪字は、罔字、純音と讀す。清
 の長洲の人、晩に曉華に居り、因り
 て自ら號とす。順治十二年の進士。
 康熙十八年鴻博に擧げられ、編輯
 を授けらる。詩は王新城と名を齊

うす、時に汪王と稱す。文は魏史に
 根柢し。清朝三家の一たり。康熙二
 十二年卒す。年六十五。
 【汪氏】^{マツ} 廣く深き貌。周馬相如、
 一」
 【汪氏】^{マツ} 〇汪罔を見よ。
 【汪氏】^{マツ} 〇汪罔の盛んに流るる貌。柳
 宗元、捕蛇者說、「一山、出、湯曰、君
 特二其而生之乎」
 【汪氏】^{マツ} 〇廣く深き貌。淮
 南、傲風、一」
 【汪氏】^{マツ} 〇水の大なる貌。唐書、杜
 南傳、一、千、萬、萬、一」
 【汪氏】^{マツ} 〇大いにして廣き貌。蘇軾詩
 「新秋已晴、九、一」
 【汪氏】^{マツ} 〇漢の多き貌。陳季詩、「可、望
 不、可、即、血、一」
 【汪氏】^{マツ} 〇漢の多き貌。柳宗元賦、「魂、恍
 惘、若、有、一」

【沃】^{マツ} 〇水がふかくひろし(深廣)○
 大なる貌。○濁りたる池。
 【沃罔】^{マツ} 沃字は、罔字、純音と讀す。清
 の長洲の人、晩に曉華に居り、因り
 て自ら號とす。順治十二年の進士。
 康熙十八年鴻博に擧げられ、編輯
 を授けらる。詩は王新城と名を齊

【沃】^{マツ} 〇水がふかくひろし(深廣)○
 大なる貌。○濁りたる池。
 【沃罔】^{マツ} 沃字は、罔字、純音と讀す。清
 の長洲の人、晩に曉華に居り、因り
 て自ら號とす。順治十二年の進士。
 康熙十八年鴻博に擧げられ、編輯
 を授けらる。詩は王新城と名を齊

【沃】^{マツ} 〇水がふかくひろし(深廣)○
 大なる貌。○濁りたる池。
 【沃罔】^{マツ} 沃字は、罔字、純音と讀す。清
 の長洲の人、晩に曉華に居り、因り
 て自ら號とす。順治十二年の進士。
 康熙十八年鴻博に擧げられ、編輯
 を授けらる。詩は王新城と名を齊

【沃】^{マツ} 〇水がふかくひろし(深廣)○
 大なる貌。○濁りたる池。
 【沃罔】^{マツ} 沃字は、罔字、純音と讀す。清
 の長洲の人、晩に曉華に居り、因り
 て自ら號とす。順治十二年の進士。
 康熙十八年鴻博に擧げられ、編輯
 を授けらる。詩は王新城と名を齊

【沃】^{マツ} 〇水がふかくひろし(深廣)○
 大なる貌。○濁りたる池。
 【沃罔】^{マツ} 沃字は、罔字、純音と讀す。清
 の長洲の人、晩に曉華に居り、因り
 て自ら號とす。順治十二年の進士。
 康熙十八年鴻博に擧げられ、編輯
 を授けらる。詩は王新城と名を齊

【沃】^{マツ} 〇水がふかくひろし(深廣)○
 大なる貌。○濁りたる池。
 【沃罔】^{マツ} 沃字は、罔字、純音と讀す。清
 の長洲の人、晩に曉華に居り、因り
 て自ら號とす。順治十二年の進士。
 康熙十八年鴻博に擧げられ、編輯
 を授けらる。詩は王新城と名を齊

【沿】ニ 俗字

○そふ、よる、水流又は道路によりしたがふ。書、禹貢、傳「順流而下也」○したがひよる(因)從來の物事に因る。禮、樂記「故明王以相一也」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○川の名、黄河の稱、西域の崑崙山に發源し、甘肅、陝西、山西、河南、直隸、山東を經、渤海に注ぐ、其の水黃濁、故に黃河と名づく。○かは(川)運「名山大一」○あまのがは(天漢)「銀」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○そふ、よる、水流又は道路によりしたがふ。書、禹貢、傳「順流而下也」○したがひよる(因)從來の物事に因る。禮、樂記「故明王以相一也」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○海によりそふ。國語「一州」

【沿】ニ 俗字

○たどふ(譬)「比」莊、知北遊「每下愈一」○まして、いはんや(矧)乎と結びてをやと讀む。易「繫辭」於鬼神乎(益)いよいよ、ますます、ますます(益)○(比)「茲」爾、小雅「也」永嘆「○たまふ、たまもの(賜)既と通す。○ありさま、やうす(状態)「老」情「近」○來は他人の來訪をたふとびていふ辭。司馬相如、子虛賦「足下不遠千里來」齊國

【注】「況」知二字同義なり、ましてと譯す、泥は字書に、益也と註す、爾大夫爾然、況率乎「有嘉禮、仁者、皆愛惜焉、矧燕趙之士、出爭其性者乎」の如し。

【澗】ケン 〇ながれる。〇露が光る。謝靈運詩「花上露猶一」○露の垂れる貌。〇涕を流す貌。
【注】「水」の滴きて流るる貌。張衡賦「水一而漉漉」○「心」を感ぜし者、情、淚、一今變態、二自然。〇露の垂れる貌。謝靈運詩「一」露泣、條

【注】「露」の流るる貌。檀弓「孔子一」流、涕」
【注】「涕」の流るる貌。檀弓「孔子一」流、涕」

○はなし、なみだと共に鼻より出る液「涕」(涕は目より出る液)○川の名、山東省に在り、運河に入る。
【注】「魯」魯國にある二川の名、孔子其のほとりにて子弟を教ふ、故に轉じて、孔子の學を斥す。周伯琦詩「行行望一」一澤水」

【注】「澤水」のほとり、孔子は澤水にて教授す、故に孔子の澤水とす。晉書、桓彝傳、首陽高節、求、仁而得仁、一微言、朝聞而夕死」

【注】「澤水」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澤水」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澤水」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

かし「一」解「評」「標」一註。
【注】「澗」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澗」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澗」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澗」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澗」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澗」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澗」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澗」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澗」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澗」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澗」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

【注】「澗」ははみおされる。唐書、裴胄傳、屹然不「一」

食○國を治むるに必要なるそな
 へ、法令、史、酷吏傳「法令者、治之
 具」

【治軍】軍をささむ。吳子「凡制國
 一、必教之以禮、勸之以義、以
 治化、民を治めて善に導く。魏書、
 李先傳「三皇五帝一之典」

【治外法權】外國に居住しながら
 其の在住國の法律に従はずし
 て、自國の法律に支配せらるる特
 權。

【治】○縣をささむ。漢書、蘇宣
 傳「宣子惠自知一不稱宜宜
 意」○縣知事。

【治】○くにをささむ。大學「古之
 欲明明德于天下者、先治其
 國」○治邦。

【治國平天下】國を治め天下を
 平かにする。國家を安泰にする。大
 學「國治而天下平」

【治】○をささまると亂れると。書、
 益稷「予欲聞六律五聲八音、在
 一、以出納五言」○治亂。

【治】○政治を行ふ或は第一等
 に居る。唐書、秋榮誤傳「以一一
 擢一給事中」

【治】○つみをしらべた。齊
 書、孔秀之傳「付一」

【治】○産業をささめる。史、越王
 勾踐世家「父子一、居無一獲何、
 政一萬萬」

【治】○もつれたるをささめる。

左、隱四「論一而答之也」

【治】○家の履歷などをつくる
 ふ。任昉文「將一」○一給事
 完章。

【治】○人をささむる。孟、滕文
 公「勞心者一、勞力者治一於
 人」○國を治める人、次修參看。

【有治人】無治法。國を治む
 る人はあれども、治むる法はなし、
 法は死物、之を活用するは人に在
 る。荀、君道「有亂君、無亂國」

【治者】民を治める人、政治家。○
 治人。

【治所】政廳のある所。劉禹錫文
 「孟秋至一、首冬選疾、拜尊入
 觀」

【治水】みづをささめ害を除く。水
 經注「王景字仲通、好學多藝、善
 能一一治河」

【治生】古くは進退の道を立てる。抱朴
 子「古人欲達動靜、今人欲達
 地一一治生」

【治世】○よく治まれる世。魏志、
 武帝紀注「太祖常問一子、予何
 如人、子不答、問之、子曰、
 予一一之能臣、亂世之英雄、太祖大
 笑、○其の君主の在位年。」

【治】○政のをささるるをいさ。○
 劉志、郭芝傳「所在清一有一一」
 【治】○船を修理す。漢書、食貨志
 「桑倉一、費直二萬萬餘」

【治體】世のをさめかた。任昉文
 「明一歷一」

【治中別駕】治中は中に居て政
 をする者、刺史の參佐、別駕は刺
 史(地方長官)に隨ひて巡視する時
 に別駕の車に乗る資格ある役人。蜀
 志「關士元非百里才、使為一一、
 乃得展其驥足」

【治定】をさめかだめる。禮記「王
 者功成作樂、一制禮一一制定、
 【治】一、やしきを建てる、邸宅
 を造營する(唐書、裴度傳)

【治典】太宗の職、轉じて、治國の
 法典。周禮、太宰「日一一以經一邦
 國、以治一府、以紀一萬民」

【治田】田をたがやしをさめる。漢
 書、食貨志「一勸一則益三三
 升、不勸則損亦如之、一海是故、
 【治内】内をささめる。禮記「天子
 治外、皇后一一」

【居治不亂】治りたる世
 にありて亂れん時のことと思ひ
 て、戒慎す。易、繫辭「君子安而不
 忘危、存而不亡、治而不忘
 亂、一以身安、而國家可保也」

【治任】旅行の準備、治は整理、任
 は行李の擔、孟、滕文公「昔者孔子
 没、三年之外、門人一、持歸一一
 治行」

【治方】をさめかた。漢書、武帝紀
 「朕以一、味三一、一一治海、
 【治邦】治國に同じ。

【治法】國をささむる方法。荀、君
 道「有亂君、無亂國、有治人、無
 一一」

【治病】やまひをなほす。漢書、高
 帝紀注「歸家一一」

【治賦】賦税を整理する。陳、公冶長
 「由也千乘之國、可假使治其賦、
 也、由は子路。」

【治平】國家が太平なり。漢書、王
 嘉傳「記一之功、於小過、以致一
 一一」

【治兵】軍隊を操縦する。左、隱五
 「三年而一一、入而假放」

【治】をさめかた。韓詩外傳
 「禮者一一之極也、史、樂書、其功大
 者其樂備、其一一者其禮具」

【治命】人の未だ病氣に陥らざる
 前の命令、即ち平時の命令、結草を
 見よ。

【治】病氣がなほる、本復する、
 瘥は愈、瘥に同じ。○平癒。

【治】をささると、みだれると。

【治亂】世の治ると亂れる
 と。興と亡と。歐陽修、朋黨論
 「嗚呼一一之、為人君者、可二以
 要一、治亂存亡」

【治】をささむ、政をささめる。漢
 書、趙廣傳「壹切一一、或名流聞」

【治】れいをささめ行ふ。劉向、
 雜言「孔子困于陳、蔡之間、七日
 一、不休一一」

すくも。

【出】

チュウ

水の流れ出る貌。文子、通
 【出】水の流れる貌。文子、通
 原「原流一一、冲而不盈」

【汙】

ウ

○すむ(澄)○あはし(淡)

【泥】

ナイ

川の名、直隸省に在り、槐河
 (即ち濟水)に入る。

○どろ(水和土)○ぬかるみ、
 どどろ。○けがす、けがら
 (汚)易、井卦「井一不食」○よ
 わし。○糊をつけて張る「
 泥」○南海に棲むといふ一種
 の蟲、骨なくしてぐだぐだし
 てる故、大いに酒に酔ふを
 一醉といふ。○どろの状態をな
 したるもの「金一朱一」○な
 づむ、とどこほる(漚)遊滯す
 る。論、子張「致遠恐一」○くろ
 む。○一は露のこまや

【泥】

ナイ

かなる貌。又、柔くして溼あ
 る貌。

【泥】○どろ。宋史、汪綱傳「使一
 一得入河一一泥」

【泥】○どろ。周必大詩「爭
 泥一泥」

【泥】○どろ。夏本紀
 「泥牛入海」一たび去りて返
 らざるに喩ふ。傳燈錄「我見一泥
 泥牛入海、直至三如今一泥泥消
 息」

【泥】○金のこな。唐代、新に及第
 せし者、家書に一帖字も附けて
 郷里に報ず。天寶遺事「新及第以二
 一帖字、附家書、爲一報、謂之喜
 信」○報じて及第の報知を一一報
 といふ。

【泥】ぬかるみにてする。杜
 甫、偃兵行「一一不取騎朝天」
 【泥】○どろ。宋史、朱熹傳「宋
 史、劉几傳、儒者一一致詳於形名
 度數間、而不知一清濁輕重之用」
 【泥】○どろのみぞ。韓愈詩「陷一
 泥泥、一一難往、一難返」

【泥】○どろのつきたる。項斯
 詩「草帶一一過一鹿」

【泥】○どろ。劉峻文「魚池一湖下、
 窟大一一。○沈みて下に在る
 に喩ふ。虞世南詩「蓬、思借一羽、慎、
 失、路委一一。○輕んじ惜まざる

【沾】

テン

○セン、タン
 ◎セン、タン
 ◎タフ

○ます、そふ。○添。○洪水の支流。○ひたす(漬)うるほす(濡)○器。○みる(視)うかがふ。○規。○自ら整ふる貌。○いはかるくうすし、輕薄なる貌。

【波】**ハ** 支歌
 ○なみ、水が湧き流れる。○なみだつ、波が起る。○うるほふ(潤)○うごく、動揺する。莊、外物「其孰不」○目の光「秋」○奔「は勞役の義。韓愈、論佛骨表」老少奔「棄其業次」○金「は月光。○物理學にて水面の一點よりして環狀のなみが四周に傳はり廣がる如き現象にいふ「音」「光」「電」○つみ「雷」○波。
 【波】**ハ** 支歌
 ○なみ、水が湧き流れる。○なみだつ、波が起る。○うるほふ(潤)○うごく、動揺する。莊、外物「其孰不」○目の光「秋」○奔「は勞役の義。韓愈、論佛骨表」老少奔「棄其業次」○金「は月光。○物理學にて水面の一點よりして環狀のなみが四周に傳はり廣がる如き現象にいふ「音」「光」「電」○つみ「雷」○波。

光逸傳「家貧衣單、一、無可代」。【波】**ハ** 支歌
 ○なみ、水が湧き流れる。○なみだつ、波が起る。○うるほふ(潤)○うごく、動揺する。莊、外物「其孰不」○目の光「秋」○奔「は勞役の義。韓愈、論佛骨表」老少奔「棄其業次」○金「は月光。○物理學にて水面の一點よりして環狀のなみが四周に傳はり廣がる如き現象にいふ「音」「光」「電」○つみ「雷」○波。

【波】**ハ** 支歌
 ○なみ、水が湧き流れる。○なみだつ、波が起る。○うるほふ(潤)○うごく、動揺する。莊、外物「其孰不」○目の光「秋」○奔「は勞役の義。韓愈、論佛骨表」老少奔「棄其業次」○金「は月光。○物理學にて水面の一點よりして環狀のなみが四周に傳はり廣がる如き現象にいふ「音」「光」「電」○つみ「雷」○波。

【波】**ハ** 支歌
 ○なみ、水が湧き流れる。○なみだつ、波が起る。○うるほふ(潤)○うごく、動揺する。莊、外物「其孰不」○目の光「秋」○奔「は勞役の義。韓愈、論佛骨表」老少奔「棄其業次」○金「は月光。○物理學にて水面の一點よりして環狀のなみが四周に傳はり廣がる如き現象にいふ「音」「光」「電」○つみ「雷」○波。

【波】**ハ** 支歌
 ○なみ、水が湧き流れる。○なみだつ、波が起る。○うるほふ(潤)○うごく、動揺する。莊、外物「其孰不」○目の光「秋」○奔「は勞役の義。韓愈、論佛骨表」老少奔「棄其業次」○金「は月光。○物理學にて水面の一點よりして環狀のなみが四周に傳はり廣がる如き現象にいふ「音」「光」「電」○つみ「雷」○波。

【波】**ハ** 支歌
 ○なみ、水が湧き流れる。○なみだつ、波が起る。○うるほふ(潤)○うごく、動揺する。莊、外物「其孰不」○目の光「秋」○奔「は勞役の義。韓愈、論佛骨表」老少奔「棄其業次」○金「は月光。○物理學にて水面の一點よりして環狀のなみが四周に傳はり廣がる如き現象にいふ「音」「光」「電」○つみ「雷」○波。

【波】**ハ** 支歌
 ○なみ、水が湧き流れる。○なみだつ、波が起る。○うるほふ(潤)○うごく、動揺する。莊、外物「其孰不」○目の光「秋」○奔「は勞役の義。韓愈、論佛骨表」老少奔「棄其業次」○金「は月光。○物理學にて水面の一點よりして環狀のなみが四周に傳はり廣がる如き現象にいふ「音」「光」「電」○つみ「雷」○波。

沫

○ほのぐらし(微明)○地名、古の衝の邑、殷の都の朝歌をいふ、今の河南省淇縣。詩、鄭風「之鄉矣」○かほあらふ。類。

泡

○あわ、水の上のうたかた(水上浮瀕)○ーは水の流れる貌。又、水の噴き涌く聲。○さかんなり(盛)

泊

○とまる、舟を止める、船が岸に附く、とどまる、とどむ。○しづか、さびり、利慾に迷はず「恬」○「澹」○うすし(薄)○怒うすし。○ふなつき、ふなやどり。○粉「は衆多なる貌。○漂」○「飄」○はさす(すむ)流寓(流)

沫

○あわ「浮」○泡「飛」○つばき(唾)○だれ(涎)○「涎」○とばしり、みづたま、ゆばな(湯華)○やむ(已)○あせの流れる貌。

法

○のり、かた「式」○おきて(制令)制度○れいぎ、作法「禮」○つね(常)○けいばつ(刑罰)○てほん(罰)○かたち(象)○さだめ。○てだて、しかた。○したがる。○のつとる、てほんとする、手本としてならふ。易、繫辭「崇效天、卑地」○「闢道の義に用ふ」○「傳」○「説」○「師」○「燈」○「割算の割る方の數、除數。○佛蘭西」○「貨幣フランのあて字。○國名、蘭西」○「の簡稱」○「昔」○「戰記」

法

○のり、かた「式」○おきて(制令)制度○れいぎ、作法「禮」○つね(常)○けいばつ(刑罰)○てほん(罰)○かたち(象)○さだめ。○てだて、しかた。○したがる。○のつとる、てほんとする、手本としてならふ。易、繫辭「崇效天、卑地」○「闢道の義に用ふ」○「傳」○「説」○「師」○「燈」○「割算の割る方の數、除數。○佛蘭西」○「貨幣フランのあて字。○國名、蘭西」○「の簡稱」○「昔」○「戰記」

【沫】**ハ** 支歌
 ○あわ、水の上のうたかた(水上浮瀕)○ーは水の流れる貌。又、水の噴き涌く聲。○さかんなり(盛)

【泊】**ハ** 支歌
 ○とまる、舟を止める、船が岸に附く、とどまる、とどむ。○しづか、さびり、利慾に迷はず「恬」○「澹」○うすし(薄)○怒うすし。○ふなつき、ふなやどり。○粉「は衆多なる貌。○漂」○「飄」○はさす(すむ)流寓(流)

【沫】**ハ** 支歌
 ○あわ「浮」○泡「飛」○つばき(唾)○だれ(涎)○「涎」○とばしり、みづたま、ゆばな(湯華)○やむ(已)○あせの流れる貌。

【法】**ハ** 支歌
 ○のり、かた「式」○おきて(制令)制度○れいぎ、作法「禮」○つね(常)○けいばつ(刑罰)○てほん(罰)○かたち(象)○さだめ。○てだて、しかた。○したがる。○のつとる、てほんとする、手本としてならふ。易、繫辭「崇效天、卑地」○「闢道の義に用ふ」○「傳」○「説」○「師」○「燈」○「割算の割る方の數、除數。○佛蘭西」○「貨幣フランのあて字。○國名、蘭西」○「の簡稱」○「昔」○「戰記」

【法】**ハ** 支歌
 ○のり、かた「式」○おきて(制令)制度○れいぎ、作法「禮」○つね(常)○けいばつ(刑罰)○てほん(罰)○かたち(象)○さだめ。○てだて、しかた。○したがる。○のつとる、てほんとする、手本としてならふ。易、繫辭「崇效天、卑地」○「闢道の義に用ふ」○「傳」○「説」○「師」○「燈」○「割算の割る方の數、除數。○佛蘭西」○「貨幣フランのあて字。○國名、蘭西」○「の簡稱」○「昔」○「戰記」

【泛駕之馬】泛は覆、逸氣ありて軌轡に備はざる馬。常軌に従はざる英雄に喩ふ。漢書武帝紀、夫泛池之士、亦在御之而已。

【泮】ハツ

○ちる(散)とく、氷がとける。詩、邶風「追冰未泮」。泮、○わかつ「剖」。○判。○さし。○畔。

【泮汗】ハツ水の大にして、はてしなき貌。左思、吳都賦「瀟瀟泮泮」。古、諸侯の郷射を習はず。泮にして、諸侯の學校。東門以南は水をめぐらし、以北は水なし、故に泮といふ(天子には辟雍といふ)。

【泮宮】ハツ氷がとけちる。易林「冰將泮」。泮宮の水。詩、魯頌「思樂泮水」。泮宮の水。詩、魯頌「思樂泮水」。

【泌】ヒツ

○いづみのはやく流れる貌。○ながれ。○しむ、にじみ出る。「分」。○尿。小便を排出する機能。

【冷】レイ

○清く涼しき貌。又、音聲の盛んに溢れる貌。又、水又は風の清らかなる聲。○風が和ぐ。○音樂師。左、成九「問其族、曰一人也」。古、俗に通ず。

【冷風】レイ風。おだやかなる風。呂覽、任地「子能使子之野盡爲一一乎」。和風。

【冷冽】レイ水の清き聲。陸機詩「山瀟瀟」。○風の聲。宋玉、風賦「清冽」。○病折。○清く涼しき貌。東方朔、七諫「下而來風」。○音聲の盛んに溢れる貌。陸機、文賦「音一而盈耳」。

【泓】ハツ

○酒味既一、酒氣又氣。

【沸】ヒツ

○わく、にえたぎる、水が熱を受けて煮えたる。鼎。○煮。○そそぐ。○わく、泉がわき出る、噴水する「噴」。○水のはけしくわき立つ聲。○解に怒る貌。

【沸騰】ヒツ水が沸騰する。高啓詩「一還長瀾竹鳴」。○湯がわきあがる。漢書、注「如」。

【沸騰】ヒツ湯のたぎりたる。文同詩、六月日正卒、大暑若。○湯がわきあがる。漢書、注「如」。

【沸騰】ヒツ湯のたぎりたる。文同詩、六月日正卒、大暑若。○湯がわきあがる。漢書、注「如」。

【沸騰】ヒツ湯のたぎりたる。文同詩、六月日正卒、大暑若。○湯がわきあがる。漢書、注「如」。

【注】アイ

○渥。○注は川の名、甘肅省に在り。○くほむ。又、其の地。○窪。○ふかし(深)。○たまり水(渇水)。○まがる(曲)。

【注】アイ注。○渥。○注は川の名、甘肅省に在り。○くほむ。又、其の地。○窪。○ふかし(深)。○たまり水(渇水)。○まがる(曲)。

【洩】エイ

○はなし(鼻液)目より出るは涕、鼻より出るは。○鼻。○なみだ。○内則「不敢唾」。

【洩】エイ

○はろふ(減)つかる(盡)。○はひろく暗くして分明ならず。○水の流の清き貌。○眩。○は目の安からざる貌。

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

【洩】エイ

帝紀「明君之德、啓迪一、諸縣康又、光昭三六曲」晉書、樂志「元首數一一、百廢股肱、忠良」

【洪亮】^{フウリョウ} 大いなるなり。許渾詩「洪亮」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【洪】^{フウ} 大いなるなり。許渾詩「洪」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【洪】^{フウ} 大いなるなり。許渾詩「洪」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【洪】^{フウ} 大いなるなり。許渾詩「洪」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【酒】^{シユ} 大いなるなり。許渾詩「酒」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【酒】^{シユ} 大いなるなり。許渾詩「酒」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【洲】^{シウ} 大いなるなり。許渾詩「洲」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【洲】^{シウ} 大いなるなり。許渾詩「洲」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【洲】^{シウ} 大いなるなり。許渾詩「洲」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【洲】^{シウ} 大いなるなり。許渾詩「洲」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【洲】^{シウ} 大いなるなり。許渾詩「洲」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【洲】^{シウ} 大いなるなり。許渾詩「洲」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【洲】^{シウ} 大いなるなり。許渾詩「洲」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

【洲】^{シウ} 大いなるなり。許渾詩「洲」高潔自天來。曹毗詩「一一、高潔自天來」

都(一)とほし(遠)〇ひとし(均)〇一洗(洗)はこゑを出さずして泣く。魯語「無一洗」

如

〇川の名、直隸省に在り。〇水にひたり湯ふ(漸湯)又、其の地。詩、魏風「彼汾沮」

洗

〇あらふ、足をあらひすすぐ(酒足)〇きよし、いさぎよし(潔)〇すすぐ、きよむ。〇たらしの類、みづ(ほし)葉(水)器(儀禮、士冠禮)設(于)東榮(〇一禮は基督教のみにて信者になる者に施す儀式、今までの罪惡をあらひ去る意にて信者の頭に水を灌ぐもの。一浸禮)

【洗胃】むくろをすすぎよむ。改心する義。南史、荀伯玉傳、存刀割腸、飲灰、洗胃。【洗髮】あらひてひのしをかける。文同、時、爭若新。【洗寢】罪なきを明らかにしてゆるす。唐書、蘇頌傳、蘇頌其誣、多從一洗。【洗髮】髪を洗つ。唐書、吳武毅傳、蘇頌、以信四海。【洗甲】洗兵に同じ。宋史、樂志、覆五連、輪海、一洗天。【洗肝】心もすすぎよむ。心をさっぱりと洗つ。蘇軾詩「江水洗我肝」。【洗眼】目をあらふ。章孝標詩「馬頭漸向揚州郭、爲報時人一一看」。【洗刷】あらひけづる。蘇軾詩「豈效三世俗人、一一求一洗」。【洗臉】洗面をあらふ。【洗情】心もあらふ。十六國春秋「一一洗情」。【洗心】心をあらひよむ。易、繫辭、聖人以此洗心、退藏於密。【洗淨】あらひ清める。【洗車雨】陰曆七月七日の雨(田家五行雜占)。【洗手花】難冠花の異名。東京夢華錄、十二月街市盡賣。【洗如】さっぱりとしたる貌。梅堯臣詩「醉坐人曰、我虛久」。【洗拭】あらひぬぐひて清くする。白居易詩「一一金杯一拂玉」。【洗足】あしをあらふ。梁宣帝賦「馮石而爲洗、因洗滌」。【洗雪】あらひすすぐ。はぢをすすぐ。後漢書、段熲傳「一一百年之遺負、以慰忠將之亡魂」。【洗汰】あらひ去る。唐書、馬總傳「洗汰」。【洗滌】あらひ去る。王粲詩「一雨洗滌」。【洗竹】竹をすすぐ。即ち竹の葉を枝を去りて疎にする。學山詩「唐詩、有一一之旨(中略)穿三沐、竹、一一其繁、一一使、分三其勢、然後枝幹茂、俗謂之一一」。【洗滌】あらふ。南史、何遜之傳「性好潔、一日之中、一一者十餘遍」。【洗滌】洗はあらひて潔を致し、積は厚きを致す。儀儀を潔重にする。書、酒誥「厥父母、自一一、致用」。【洗馬】太子の宮の馬官、行列の前驅を掌る。洗は先。漢書、百官表「太子馬官有一一」。【洗筆】ふてをすすぎ清む。白孔六帖「白樂天、一一時成、一洗其筆」。【洗兵】兵器を洗ひてをさめる。魏也。武王曰、非也、天、一一也。杜甫、洗兵馬行「安得壯士挽天河、淨洗甲兵長不用」。【洗沐】愛あらふ。官吏の休暇を賜りて家に歸る。漢書、萬石君傳「每五日、一一、歸洗沐」。【洗浴】身をあらふ。佛國記「入池一一洗浴」。

【洗拭】あらひぬぐひて清くする。白居易詩「一一金杯一拂玉」。【洗足】あしをあらふ。梁宣帝賦「馮石而爲洗、因洗滌」。【洗雪】あらひすすぐ。はぢをすすぐ。後漢書、段熲傳「一一百年之遺負、以慰忠將之亡魂」。【洗汰】あらひ去る。唐書、馬總傳「洗汰」。【洗滌】あらひ去る。王粲詩「一雨洗滌」。【洗竹】竹をすすぐ。即ち竹の葉を枝を去りて疎にする。學山詩「唐詩、有一一之旨(中略)穿三沐、竹、一一其繁、一一使、分三其勢、然後枝幹茂、俗謂之一一」。【洗滌】あらふ。南史、何遜之傳「性好潔、一日之中、一一者十餘遍」。【洗滌】洗はあらひて潔を致し、積は厚きを致す。儀儀を潔重にする。書、酒誥「厥父母、自一一、致用」。【洗馬】太子の宮の馬官、行列の前驅を掌る。洗は先。漢書、百官表「太子馬官有一一」。【洗筆】ふてをすすぎ清む。白孔六帖「白樂天、一一時成、一洗其筆」。

【洗拭】あらひぬぐひて清くする。白居易詩「一一金杯一拂玉」。【洗足】あしをあらふ。梁宣帝賦「馮石而爲洗、因洗滌」。【洗雪】あらひすすぐ。はぢをすすぐ。後漢書、段熲傳「一一百年之遺負、以慰忠將之亡魂」。【洗汰】あらひ去る。唐書、馬總傳「洗汰」。【洗滌】あらひ去る。王粲詩「一雨洗滌」。【洗竹】竹をすすぐ。即ち竹の葉を枝を去りて疎にする。學山詩「唐詩、有一一之旨(中略)穿三沐、竹、一一其繁、一一使、分三其勢、然後枝幹茂、俗謂之一一」。【洗滌】あらふ。南史、何遜之傳「性好潔、一日之中、一一者十餘遍」。【洗滌】洗はあらひて潔を致し、積は厚きを致す。儀儀を潔重にする。書、酒誥「厥父母、自一一、致用」。【洗馬】太子の宮の馬官、行列の前驅を掌る。洗は先。漢書、百官表「太子馬官有一一」。【洗筆】ふてをすすぎ清む。白孔六帖「白樂天、一一時成、一洗其筆」。

【洗拭】あらひぬぐひて清くする。白居易詩「一一金杯一拂玉」。【洗足】あしをあらふ。梁宣帝賦「馮石而爲洗、因洗滌」。【洗雪】あらひすすぐ。はぢをすすぐ。後漢書、段熲傳「一一百年之遺負、以慰忠將之亡魂」。【洗汰】あらひ去る。唐書、馬總傳「洗汰」。【洗滌】あらひ去る。王粲詩「一雨洗滌」。【洗竹】竹をすすぐ。即ち竹の葉を枝を去りて疎にする。學山詩「唐詩、有一一之旨(中略)穿三沐、竹、一一其繁、一一使、分三其勢、然後枝幹茂、俗謂之一一」。【洗滌】あらふ。南史、何遜之傳「性好潔、一日之中、一一者十餘遍」。【洗滌】洗はあらひて潔を致し、積は厚きを致す。儀儀を潔重にする。書、酒誥「厥父母、自一一、致用」。【洗馬】太子の宮の馬官、行列の前驅を掌る。洗は先。漢書、百官表「太子馬官有一一」。【洗筆】ふてをすすぎ清む。白孔六帖「白樂天、一一時成、一洗其筆」。

洮

〇川の名、蒙古より出で、甘肅省を経て黄河に入る。〇手、顔などをあらふ(盥)きよむ、あらひすすぐ。

派

〇わかれる、わけれる。〇わかれまた、えだがは(水分)流(分)一〇學問・宗教・技藝などのわかれ「學」一「黨」一「流」一「宗」一

洞

〇ほら、ほらあな(深穴)うつろ「穴」一「窟」〇ふかし(深)〇とくながれる(疾流)〇とほ(通)通達する、さとり知る。〇ほか(期)一「豁」〇つらぬく、つきとほす(貫徹)一「胸」〇一はまじめでまこと(實懇)〇巖窟の所在地。唐書、馮盎傳「諸一嶽一嶽」〇一庭は湖名、湖南岳陽縣の西南に在り。〇一は無形の貌。又、すなほ(婉順)なる貌。又、驚きつしむ貌。

【洞窟】ひろくひろく。宋史、太祖紀「汴京新宮成、御正殿一坐、令一一一門」〇洞窟。【洞窟】たに。曹植、七啓、背一一、對一芳林〇洞窟。【洞窟】よるひをつらぬく。南史、裴道恭傳「所中皆一一飲」羽、一發或實二兩人〇。【洞窟】つらぬきうごかす。郭璞、十日讀「洞一一天神懸符」〇。【洞窟】明かにきはめる。元史、張文謙傳「一一術數」〇。【洞窟】道士の居るてら。楊巨源詩「一一曾向一遊」〇。【洞窟】むねをつらぬきうごかす。

【洞窟】ひろくひろく。宋史、太祖紀「汴京新宮成、御正殿一坐、令一一一門」〇洞窟。【洞窟】たに。曹植、七啓、背一一、對一芳林〇洞窟。【洞窟】よるひをつらぬく。南史、裴道恭傳「所中皆一一飲」羽、一發或實二兩人〇。【洞窟】つらぬきうごかす。郭璞、十日讀「洞一一天神懸符」〇。【洞窟】明かにきはめる。元史、張文謙傳「一一術數」〇。【洞窟】道士の居るてら。楊巨源詩「一一曾向一遊」〇。【洞窟】むねをつらぬきうごかす。

洋

〇大いなる海「海」一「大」一〇おほし(多)〇ひろく大いなり(廣大)〇一はひろがる、はびこる、充滿する。又、衆多な

派

〇わかれる、わけれる。〇わかれまた、えだがは(水分)流(分)一〇學問・宗教・技藝などのわかれ「學」一「黨」一「流」一「宗」一

派

〇わかれる、わけれる。〇わかれまた、えだがは(水分)流(分)一〇學問・宗教・技藝などのわかれ「學」一「黨」一「流」一「宗」一

【派引】わちちひく。金史、禮志序「凡事物名數、支分一一、殊貫滲布、井然有序、炳然如丹」。【派流】諸方へ手わけしてつかはす。〇派差。【派出】手わけして出す。一一所。【派別】わかれわかれになる。左思、吳都賦「百川一一、歸海而會」。【派】めぐりながれる。又、かくれながれる。杜甫詩「一一何處入」。【派】めぐりながれる。又、かくれながれる。杜甫詩「一一何處入」。

【洗滌石】^{ワシロイシ} 〇まけ惜みの強き義に用ふ。孫楚才藻卓絶なり。少き時、王濟に問ひて、當に石に洗し洗れに漱がんと欲すといふべきを誤りて、——といふ。濟其の誤りたるをいへば、洗滌は耳を洗ふ所以、漱石は齒を漱ぐ所以なりと答へし故事(晉書、孫楚傳)〇圓環孫楚の答さすがに巧なりといふ意によりて、サスガの宛字ヲトす。

【洗石】^{ワシロシ} 圓なるほどと感じうなづく意味を表はすことば。心に思ひし通り果して、本分に違はず。前條を見よ。

【洗滌馬】^{ワシロウマ} 圓古の武備の一、馬を馳せながら鏑矢射を的中する競争の武技。

【冽】^{レツ} 風

〇きよし、水又酒などが清くすむ。清一歐陽修、醉翁亭記「泉香而酒冽」〇さびし、ひややか。

【冽風】^{レツフウ} さびきかせ。宋玉、高唐賦「冽風過而增悲哀」

【温】^{ユフ・オフ} 風

エフ・オフ

〇うるほふ。うるほす(温)「歌射利」

【洩】^{イサ} 風

〇うみ、わたつみ(天池)〇物事の衆く聚る所の義とす、文「學」歌吹一〇廣く大なる形容「容」一「瀉」

【洩】^{イサ} 船の船長以外の乗組員の稱。

【洩】^{イサ} 海内の國土、字は窟。陳傳其詩「正無廣、草木亦煥赫」

【洩】^{イサ} 海上の運漕。元史、食貨志「自三世祖用伯顏之旨、漕漕東南粟、由海道以給三京師」

【洩】^{イサ} 海魚の一、えのうを、あかえひ。〇

【洩】^{イサ} 海潮をとめるせき。元史、良史傳「家民額一、專二開船一以射利」

【海】^{カイ} 風

〇うみ、わたつみ(天池)〇物事の衆く聚る所の義とす、文「學」歌吹一〇廣く大なる形容「容」一「瀉」

【海】^{カイ} 船の船長以外の乗組員の稱。

【海】^{カイ} 海内の國土、字は窟。陳傳其詩「正無廣、草木亦煥赫」

【海】^{カイ} 海上の運漕。元史、食貨志「自三世祖用伯顏之旨、漕漕東南粟、由海道以給三京師」

【海】^{カイ} 海魚の一、えのうを、あかえひ。〇

【海】^{カイ} 海潮をとめるせき。元史、良史傳「家民額一、專二開船一以射利」

【海】^{カイ} 〇海のしほ。史、貨殖傳「吳東有海、亦江東一都會也」〇地名。漢書、地理志「會稽郡、海、故武原郡、有鹽官」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

【海】^{カイ} 〇うみ、わたつみ。謝靈運詩「一戲、春岸、天籟弄、和風」

○川の名。浙江省に在り、杭州を経て錢塘江と稱す。○浙江省の簡稱。○米とぐ、よなく(汰)誤りて浙と混用す。

【涉】

セツ

○わたる、水をかちわたりする(無舟渡水)「徒」書、君牙「心之憂危、若蹈虎尾」于春冰之危險の甚だしきに喩ふ。○ひろく通ずる「博」○ふへる(經歷)枚乗、七發「背秋一冬」○わたし。○かかはる、關係する「干」「交」「關」

【涉河】黄河をかちわたりする。左傳「誓曰、所不此報、無能一」

【涉禽】水鳥をいふ、渡水をわたりて小魚を捕食する鶻、鶯などの類

【涉秋】あきの期を渡る。朱熹詩「一未停車」

【涉水】川をかちわたりする。詩「涉風、傳以衣」爲風

【涉世】世事を經歷する。韓非子「一一如此其汗」

【涉筆】筆を動かす。李昭紀文、韓愈「一、漢文儒之紛紜」

乗、七發「然汗發」○漢一はわるる(惡醉)の貌。又、けがれに(垢濁)

【涂】

ト

○みち、田地の用水をひく溝に沿へる道。○塗。○一は露の厚き貌。○一月は陰曆十二月の異稱。○川の名。○澗

【涓】

トン

○はく(吐)あける。○一は十二支の申の異名。爾雅「太歳在申、曰一」○一は水流の曲折する貌。

【涓】

マイ

川水の名。一水は漢魏時代、今の鴨綠江の稱(史、朝鮮傳)又、隋唐時代、朝鮮の大同江の稱(隋書、高麗傳)

【浼】

マイ

○けがす、けがる(汚・汚)孟、公孫丑「爾焉能一我哉」○一は水の流れて平かなる貌。詩、邶風「河水一」

【涉塵】つたりする。鍾會文「好三書」
【涉塵】水を涉り、塵を覆る。軍書をざつとひろく覆るにいふ、博覽して專精ならざる貌。漢書、賈山傳「一ニ書記、不能爲一」

【挾】

セツ

○うるほふ、うるほす(霑)○とほる(徹)うるほひがとほる。○あまねし(洽)○ひとめぐり(周匝)「一日」周「一」
【挾】水の物をうるほす如くあまねくゆきわたる。漢書、禮樂志「於是教化一、民用和睦」

【挾和】あまねくやはらぐ。韓愈、新修陳王昭記、人史「一」

【挾會】あまねくあつまる。沈聖賦、陰九澤、而「一」

【挾日】十日間、甲より癸に至る。一めぐり。楚語、遠不過三月、近不過二、陳康、吝難、四伯營、蓋、功不「一」

【挾長】十二日間、子より亥に至る。一めぐり。左、成九、一之間、而楚克其三部「一」

【挾波】波のつらなる貌。郭璞、江賦「長波一、峻瀾摧」

【涎】

セン

○よだれ(口液)「垂」○ねばきしる、物の黏液「蟻」○涎は相連る貌。又、水の流れる貌。漢書、五行志「涎」

【涎】光澤ある貌。漢書、五行志「涎」

【涎】光澤ある貌。漢書、五行志「涎」

【涎】光澤ある貌。漢書、五行志「涎」

【涎】光澤ある貌。漢書、五行志「涎」

【涎】光澤ある貌。漢書、五行志「涎」

【涎】光澤ある貌。漢書、五行志「涎」

【涎】光澤ある貌。漢書、五行志「涎」

【涎】光澤ある貌。漢書、五行志「涎」

【涎】光澤ある貌。漢書、五行志「涎」

【涎】光澤ある貌。漢書、五行志「涎」

【涎】光澤ある貌。漢書、五行志「涎」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】

フ

○船を納れ置く溝。○浮漚(水部十四畫)の略字とす。

【浮】

フ

○うかぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】

フ

○うかぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】

フ

○うかぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【浮】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【涕】

タイ

○なみだ「垂」流「揮」○なく(泣)涙を出してなく「泣」○竹の一種「竹」

【涕】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【涕】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【涕】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【涕】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【涕】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【涕】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【涕】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【涕】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【涕】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

【涕】かぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さよふ「一」

○みぎは(水際)きし、ほとり(水邊)○轉じて窮盡の義とす、かぎり、はて、莊、養生主「吾生也有涯、而知也無涯」
 【運岸】○水のきし。庚信文「江淮無一之阻、寧無一運岸之固」
 【運流】○かぎり。通典「運海無一」

【運限】○かぎり。王僧孺文「一旦學附、遂無一」
 【運際】○かぎり。又、かぎり。庚信文「運際之、一其、運、江海之波、瀾不」

【運決】○みぎは。又、かぎり。韓愈「柳子厚、嘉、銘、沉、運、深、博、無一」
 【運流】○波うちき。柳宗元文「爲」
 【運流】○九里、丘陵、林、麓、距、其、一

【運分】○かぎり、身分相應の程度、本分。曾鞏文「運、視、其中、所有、類」
 【運】○以、有、運、無、運、
 【運】○ある壽命を以て、限りなき望を抱く。莊、養生主、吾生也、有、運、而、知、也、無、運、

【漚】○まじはる、いりまじる(混)みだる、みだす「玉石混」○にこる、にこす、かきまぜて濁

す「濁」
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、
 【濁】○濁、交、接、雜、錯、混、參、

無方剛、彼翔比、孰非一、
 育。○學、氣、質、を、養、成、す、濁、育、

【淇】○淇、河南省に在り。
 【淇】○淇、河南省に在り。
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、
 【淇】○淇、河南省に在り、

【淨宮】^{アツク}てら。梁武帝詩「慈波流ニ」梵宮。
 【淨空】^{アツク}きよきよきよ。劉孝威詩「平雲斷ニ高嶺長河隔ニ」。
 【淨教】^{アツク}清淨なるをしの義。佛敎をいふ。皇甫會詩「一傳ニ相與ニ」。
 【淨財】^{アツク}慈善のために出す職捐金。又寺への寄附金。
 【淨掃】^{アツク}きよきはらふ。王昌齡詩「一陰山ニ無鳥投ニ」。
 【淨潔】^{アツク}ところをいさぎよくす。春秋繁露「君子平ノ意以レ」。
 【淨宮】^{アツク}きれいに書きうつす。
 【淨色】^{アツク}清き色。張籍詩「一在ニ霜枝ニ」。
 【淨潔】^{アツク}きよらかにたつ。周敦頤愛蓮賦「不レ蔓レ不レ枝レ」。
 【淨水】^{アツク}手あらひみづ。
 【淨沼】^{アツク}水のすめるいけ。劉兼詩「蓮枝ニ一翠香散ニ」。
 【淨洗】^{アツク}きよくあらふ。杜甫「洗兵馬詩」安得壯士提ニ天河ニ一甲兵ニ常用ニ」。
 【淨潔】^{アツク}きよめす。孟郊詩「一掛碧ニ遠消ニ千慮ニ」。
 【淨掃】^{アツク}きよらかなる。しかけ。謝朓詩「一掃涼臥ニ危欄入ニ醉凭ニ」。
 【淨地】^{アツク}淨土に同じ。
 【淨土】^{アツク}三毒五濁の業なき清淨なる國土。人間界を穢土といふの對。

對。大藏法數「佛土名ニ」。常清淨。自然無一切雜穢ニ。佛土。淨土。淨界。淨域。佛土。
 【淨土真宗】^{アツク}真宗の別稱。淨土宗より分派したるが故。
 【淨土宗】^{アツク}佛敎の一派。普賢を以て初祖とす。南無阿彌陀佛の名號を念じ、他力本願にて極樂へ往生するを主旨とす。我國にては、法然上人(蓮池)に始まる。
 【淨土之學】^{アツク}佛敎の學問。劉程之文「集ニ於廬山之般若臺ニ」。
 【淨琉璃鏡】^{アツク}圓地獄の圓鏡の對にありといふ鏡。亡者生前の所業が盡く映じ現るといふ。
 【淨法】^{アツク}佛法によりて受ける清きさいはひ。徐陵文「大領ニ財寶ニ同修ニ」。
 【淨觀】^{アツク}きよくしてあをし。梅堯臣詩「一如ニ磨銅ニ」。
 【淨潔】^{アツク}きよきよせ。張喬詩「一煙霞古ニ寒原草木凋ニ」。
 【淨琉璃】^{アツク}一種の美しくしき世界。藥師琉璃光如來本願經「東方去ニ此過ニ十萬億那由他の諸佛ニ。有ニ世界名ニ」。
 【淨琉璃の稱】^{アツク}又特に觀世音菩薩の稱。もと淨瑠璃姫の事蹟を作りに始まる。故に名づく。淨瑠璃。
 【淨法】^{アツク}佛法のはなし。鄭谷詩「幾思ニ開ニ」。雨後對ニ禪林ニ」。法

【淪】^{セン}江の名。淅に同じ。
 【淅】^{セン}とぐ。米をよなぐ。又、其の米。孟萬章「接レ而行レ炊レ爲レめにとぎかけたる米をすくひあけて持ち行く。去ることの急なるにいふ。〇一雨又は風の聲。杜甫詩「朔風鳴レ寒雨ニ下霏霏ニ」。
 【淅】^{セン}風雨などの聲。字解參看。
 【淅】^{セン}雨。又風の聲。謝惠連雪賦「一而先集ニ」。淅淅。〇あはれにさびしき鳥。李白詩「飛霜早一。絳聽ニ恐休ニ」。淅淅。淅淅。
 【淅】^{セン}汎は、水の微小なる貌。一に波の急なる聲。
 【淺】^{セン}あさし。深の對「清」〇あさくす。〇うすし「薄」〇聞くところ少し。智識學問などがあさはか「一學」。〇虎の

【一全不動】
 【淺才】^{アツク}あさはかなるちよ。高適詩「一登ニ命ニ孤劍過ニ萬里ニ」。
 【淺嘗】^{アツク}うすむらさき。歐陽修詩「一紅ニ看ニ難ニ好ニ顏色ニ不ニ奈ニ東風吹ニ」。
 【淺識】^{アツク}知ること淺し。淺き見識。北史「陽固傳」梁丘蓋習ニ王緒ニ」。
 【淺財】^{アツク}小さかもり。宋長編「於ニ館金帳中ニ一低唱ニ」。
 【淺酌】^{アツク}さかもり。白居易詩「玉杯ニ一巡初匝ニ金管吹曲未ニ終ニ」。小酌。淺酌。
 【淺淺】^{アツク}水のあさきみぎは。儲光羲詩「一花ニ一花ニ」。
 【淺水】^{アツク}あさきみづ。劉得仁詩「片雲生ニ石竇ニ」。一臥ニ古松ニ」。
 【淺笑】^{アツク}ほほえむ。孫觀「探梅詩」美人ニ一應ニ雲鬢ニ」。一微笑。
 【淺短】^{アツク}水の疾く流れる貌。楚辭「九歌」石濤兮ニ一。〇少しづつ。吳融詩「魚網徐ニ徐ニ。銀尾ニ一傾ニ」。
 【淺鮮】^{アツク}すくなくなし。史「刺客傳」臣之所ニ以待ニ之ニ。至ニ一矣ニ」。
 【淺帶】^{アツク}おびをゆるくむすぶ。閑暇迫らざる貌。李白文「羅衣ニ一。十有五人」。
 【淺短】^{アツク}あさはかておとる。蜀志「諸葛亮傳」智術ニ一。遂用ニ驅ニ」。淺劣。
 【淺白】^{アツク}うすじろし。碧雜漫志「或紅ニ或淺紅ニ或白ニ或一」。〇水部 (八畫)

【淪】^{セン}水の流れる聲。陸游詩「洗ニ耳石濤ニ」。淪淪。淪淪。
 【淪】^{セン}水の流れる貌。又、其の聲。高適詩「石泉ニ一若ニ風雨ニ」。
 【淪】^{セン}又淪に作る。
 【漣】^{セン}波のよせたむ貌。〇漣は沙石が水に随ふ貌。
 【漣】^{セン}唾(口部八畫)に同じ。
 【漣】^{セン}よなぐ。水にてゆりよどませて善きと悪きとをよりわけ。〇善を取りて悪を去る「一汰」〇「あ」とぐ「淅米」「淨」〇ながれる。ながす。
 【淘】^{セン}金をよりわけ。許渾詩「淘丁多ニ新石ニ。鑿女牛ニ一」。〇淘沙。〇淘沙。人の性質及運命は其の生れたる日の干支(定)にて定まるものとし、之をよなげて吉とす。凶を去り、運命を開くを旨とする教義。
 【淘】^{セン}よなぐ。えりすぐる。淘一に洗に作る。後漢書「陳元傳」洗ニ汰ニ學者之累ニ」。
 【淘】^{セン}流れる貌。〇淘淘。
 【淘】^{セン}よなぐ。す。悪を去りて好を取る。魏都賦「將ニ石子ニ一玩弄」。〇水部 (八畫)

【淖】^{ダウ}どろ(泥)〇ぬかる。ぬま。ぬかるみ「一淖」〇うるぼふ(濡)〇〇やはらぐ(和)〇〇濡る「沈」〇〇しなやか、綿に通ず。
 【淖】^{ダウ}ぬかる。ぬかるみ。揚載詩「長衢方ニ一」。
 【淖】^{ダウ}どろどろしたるかゆ。陸游詩「食有ニ一。穠足ニ飽ニ」。
 【淖】^{ダウ}しなやか(柔弱)なる貌。莊「遺遊遊。肌膚若ニ冰雪ニ」。一若ニ處子ニ一」。
 【涿】^{タク}〇川の名、直隸省涿州にあり。〇一鹿は地名、古、黃帝の都、直隸省宣化府保安州の南に在り。〇したたる(流下滴)〇うつ(擊)
 【淡】^{タン}あはし、うすし(薄)さっぱりする。濃の對。〇水の満つる貌。〇薄き味、粗食。〇心がさっぱりして名譽や利慾などの念が薄い「一泊」〇「恬」〇まみづ「一水」〇鹹の反對。〇澹「一は風に隨ふ貌。又、水のひろがり

【淋池】水の流れこむいけ。王子年拾遺記「穿一窟千步」
 【淋巴液】高等動物が組織間に有する無色透明の液。淋巴管により乳糜と合して心臓に入る。其管の會合する所を淋巴腺といふ。英語の音譯。明汁。
 【淋浪】みだれる貌。韓愈詩「一身上衣。顛倒筆下字」
 【淋瀝】したたる貌。楊億詩「圓荷清曉露」
 【淋瀝】○長き貌。楚辭「哀時命」
 【淋瀝】○大いなる貌。揚雄「羽獵賦」
 【淋瀝】水のしたたる貌。曹植賦「曉芝雲之噴噴」
 【淋瀝】したたる。盧思道文「雨脚止其」
 【淋瀝】したたる。北史「齊宣皇后李氏傳」
 【涼】○すし(薄)「一徳」○すし(薄寒)「納」○かなしむ。○風にあたらしむる。○州の名。今の甘肅省。○國名。東晉の時、先後して甘肅の地に分據せし者。國號を「涼」といふ。前。

○涼

後北西南之を五といふ。○たすく(佐)○まこと(信)○諒。○すすし、清らかにしてすすし「眼元」○すすみ。すすむ(納涼)「夕」
 【涼意】すすしきけはひ、涼しき。孔平仲詩「獨將」
 【涼風】すすしきこかげ。晉書「潘岳傳」
 【涼雨】すすしきあめ。岑參詩「蒼翠」
 【涼夏】すすしきなつ。黃庭堅詩「詩同」
 【涼風】すすしき。岑參詩「八月」
 【涼風】すすしき。岑參詩「八月」
 【涼風】すすしき。岑參詩「八月」

○淚

○なみだ。眼から出る液「涕」。涕は鼻から出るなみだ。「別」。血「感」。暗「愁」。○なみだを出して泣く、なく。○疾く流れる貌「涙」。涙と通ず。
 【淚】○なみだ。眼から出る液「涕」。涕は鼻から出るなみだ。「別」。血「感」。暗「愁」。○なみだを出して泣く、なく。○疾く流れる貌「涙」。涙と通ず。
 【淚】○なみだ。眼から出る液「涕」。涕は鼻から出るなみだ。「別」。血「感」。暗「愁」。○なみだを出して泣く、なく。○疾く流れる貌「涙」。涙と通ず。

○凌

○はす(馳)のる(乘)○ふ(歷)木華、海賦「汎海」
 【凌】○はす(馳)のる(乘)○ふ(歷)木華、海賦「汎海」
 【凌】○はす(馳)のる(乘)○ふ(歷)木華、海賦「汎海」

○渥

○あつし(厚)てあつし。詩、小雅「既優既」
 【渥】○あつし(厚)てあつし。詩、小雅「既優既」

○涓

○川(史、樂書)の別は厚「部七畫」の條を見よ。
 【涓】○川(史、樂書)の別は厚「部七畫」の條を見よ。
 【涓】○川(史、樂書)の別は厚「部七畫」の條を見よ。

○涓

○川の名、甘肅省「源縣」より出づ、陝西省の大川、洛水と合し、黄河に入る。○城は咸陽。
 【涓】○川の名、甘肅省「源縣」より出づ、陝西省の大川、洛水と合し、黄河に入る。○城は咸陽。

○游

○およぐ(泳)水に浮びゆく、および。○遊(行)あそぶ、あそび。○遊(事)あそぶ、あそび。○遊(民)「食」「手」
 【游】○およぐ(泳)水に浮びゆく、および。○遊(行)あそぶ、あそび。○遊(事)あそぶ、あそび。○遊(民)「食」「手」

○游

○天子の山遊。唐書、貴妃紀氏傳「紀每從」
 【游】○天子の山遊。唐書、貴妃紀氏傳「紀每從」

符瑞志「一得石函、中有小青石、刻作「皇帝字」湖畔。」
【湖北】省の名。揚子江に跨り、洞庭湖の北に在り、禹貢の荊州の域、武昌を省治とす。

【渾】

◎ゴン 混に

①にらる(濁)まじる。○くばし(汚下)○大いなり、物の氣形質具りて未だ分れず、唯ばとして大いなるさま「一池」
「一論」○ひとしくおなじ(齊同)ひとまとめ。○すぶ、すべて。○一は水の盛んに流れる貌。②渾渾。○一教は開通せざる貌。又、古の凶人の名(左文十八)「混沌・渾沌」
【渾】水・凡・純。○渾は、ひとまるめに打ち混じて分かれぬ。杜詩「渾渾不勝簪」○凡は皆也。およそとも訓む。純體を計へていふ調、純に近し。通鑑「統緒國五、新國三、凡八大國」○純は純體をいふ、衆東也と註す。もと糸を組合す義より出づ、多くの物を一つにすべ合はせる義。別の字に對す、列子の「居人民之上、純一國之事」の義を專用して助辭とす。○註はよせ合せる義、純也、衆也と註す、幾らずあつむるをいふ。曹丕文「頃

漢書文・都爲「一集」

【渾】漢書文・都爲「一集」
【渾】沈作誥「富商氣貫一」
【渾河】○滿洲奉天府の南方を流れて遼河に入る、源を南滿洲の邊に發し、東北より西南に向ひて流る、奉天大會戰の前、兩軍此河を挟みて陣し、屢々激戰す。○山西・直隸の桑乾河の一名。
【渾家】○妻。戎昱「苦哉行」身爲「最」
【渾家】○妻。戎昱「苦哉行」身爲「最」
【渾家】○妻。戎昱「苦哉行」身爲「最」
【渾家】○妻。戎昱「苦哉行」身爲「最」
【渾家】○妻。戎昱「苦哉行」身爲「最」
【渾家】○妻。戎昱「苦哉行」身爲「最」
【渾家】○妻。戎昱「苦哉行」身爲「最」
【渾家】○妻。戎昱「苦哉行」身爲「最」
【渾家】○妻。戎昱「苦哉行」身爲「最」
【渾家】○妻。戎昱「苦哉行」身爲「最」

【渚】

◎シク

○露の多き貌。○盛んなる貌。詩「小雅」露渚一兮。○したむ、酒をしぼりて糟を去る。詩「小雅」有酒「我」酌。○さらふ(渡)
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」

【澗】

◎シク

○川の名。○をり、かす(滓)
【澗】かす、をり、沈澱物。康熙字典「俗以此爲「一」字」
【澗】かす、をり、沈澱物。康熙字典「俗以此爲「一」字」
【澗】かす、をり、沈澱物。康熙字典「俗以此爲「一」字」
【澗】かす、をり、沈澱物。康熙字典「俗以此爲「一」字」
【澗】かす、をり、沈澱物。康熙字典「俗以此爲「一」字」
【澗】かす、をり、沈澱物。康熙字典「俗以此爲「一」字」
【澗】かす、をり、沈澱物。康熙字典「俗以此爲「一」字」
【澗】かす、をり、沈澱物。康熙字典「俗以此爲「一」字」
【澗】かす、をり、沈澱物。康熙字典「俗以此爲「一」字」
【澗】かす、をり、沈澱物。康熙字典「俗以此爲「一」字」

【渾】

◎ゴン 混に

○露の多き貌。○盛んなる貌。詩「小雅」露渚一兮。○したむ、酒をしぼりて糟を去る。詩「小雅」有酒「我」酌。○さらふ(渡)
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」
【渚】盛んなる貌。詩「小雅」其葉「一」

【渚】

◎シク

○はかる、水の深淺をはかる。又、すべて物の廣狹・遠近・高下大小等を量る。○心にて推し考へる、思ひはかる。○はからる、易、繫辭「不」之謂神。
【測】計・計・量・度・秤・料・付・機等の別は計(言部二畫)の條を見よ。
【測】日かげをはかる。南史、梁元帝紀「土圭」仙人承「露」北史、秦王使傳「置」渾天儀「一表」
【測】海の深淺をはかる具。繩の端に鉛のおもりをつけたもの。
【測】はかる。隋書「天文志」
【測】分「二」步星度「一」
【測】量り極める、測量し研究する。宋玉、神女賦「盛矣麗矣、離」
【測】はかりしらべる。齊東野語「留」此以備「一」
【測】天文氣象をはかる「一」
【測】漢初「一」乃知三五星皆有「逆行」

【渚】

◎シク

○はかる、水の深淺をはかる。又、すべて物の廣狹・遠近・高下大小等を量る。○心にて推し考へる、思ひはかる。○はからる、易、繫辭「不」之謂神。
【測】計・計・量・度・秤・料・付・機等の別は計(言部二畫)の條を見よ。
【測】日かげをはかる。南史、梁元帝紀「土圭」仙人承「露」北史、秦王使傳「置」渾天儀「一表」
【測】海の深淺をはかる具。繩の端に鉛のおもりをつけたもの。
【測】はかる。隋書「天文志」
【測】分「二」步星度「一」
【測】量り極める、測量し研究する。宋玉、神女賦「盛矣麗矣、離」
【測】はかりしらべる。齊東野語「留」此以備「一」
【測】天文氣象をはかる「一」
【測】漢初「一」乃知三五星皆有「逆行」

【渚】

◎シク

○はかる、水の深淺をはかる。又、すべて物の廣狹・遠近・高下大小等を量る。○心にて推し考へる、思ひはかる。○はからる、易、繫辭「不」之謂神。
【測】計・計・量・度・秤・料・付・機等の別は計(言部二畫)の條を見よ。
【測】日かげをはかる。南史、梁元帝紀「土圭」仙人承「露」北史、秦王使傳「置」渾天儀「一表」
【測】海の深淺をはかる具。繩の端に鉛のおもりをつけたもの。
【測】はかる。隋書「天文志」
【測】分「二」步星度「一」
【測】量り極める、測量し研究する。宋玉、神女賦「盛矣麗矣、離」
【測】はかりしらべる。齊東野語「留」此以備「一」
【測】天文氣象をはかる「一」
【測】漢初「一」乃知三五星皆有「逆行」

【渚】

◎シク

○はかる、水の深淺をはかる。又、すべて物の廣狹・遠近・高下大小等を量る。○心にて推し考へる、思ひはかる。○はからる、易、繫辭「不」之謂神。
【測】計・計・量・度・秤・料・付・機等の別は計(言部二畫)の條を見よ。
【測】日かげをはかる。南史、梁元帝紀「土圭」仙人承「露」北史、秦王使傳「置」渾天儀「一表」
【測】海の深淺をはかる具。繩の端に鉛のおもりをつけたもの。
【測】はかる。隋書「天文志」
【測】分「二」步星度「一」
【測】量り極める、測量し研究する。宋玉、神女賦「盛矣麗矣、離」
【測】はかりしらべる。齊東野語「留」此以備「一」
【測】天文氣象をはかる「一」
【測】漢初「一」乃知三五星皆有「逆行」

【渚】

◎シク

○はかる、水の深淺をはかる。又、すべて物の廣狹・遠近・高下大小等を量る。○心にて推し考へる、思ひはかる。○はからる、易、繫辭「不」之謂神。
【測】計・計・量・度・秤・料・付・機等の別は計(言部二畫)の條を見よ。
【測】日かげをはかる。南史、梁元帝紀「土圭」仙人承「露」北史、秦王使傳「置」渾天儀「一表」
【測】海の深淺をはかる具。繩の端に鉛のおもりをつけたもの。
【測】はかる。隋書「天文志」
【測】分「二」步星度「一」
【測】量り極める、測量し研究する。宋玉、神女賦「盛矣麗矣、離」
【測】はかりしらべる。齊東野語「留」此以備「一」
【測】天文氣象をはかる「一」
【測】漢初「一」乃知三五星皆有「逆行」

る、時勢の甚だしく移りかへる。神仙傳、麻姑謂王方平曰、自接待以來、見東海三變爲桑田、向到蓬萊、水乃淺於往者、略半也。豈復爲陸乎、方平乃曰、東海行復揚塵耳。

【澹淵】○神仙の居る所、澹淵洲の略。杜市詩「支園一莽空闊」○江湖と同義。朝市に對していふ。南史、張充傳「飛卒釣澹淵三足」○○みなかの水濱。陸雲、泰伯碑「一遺跡、箕山僻位」

【澹荒】○あをとして廣き貌。柳宗元、招海賈文「一無形、往來適卒」○澹荒。

【澹荒】○あをならばら。武帝内傳「諸仙玉女、聚居一澹海」

【澹浪歌】○澹浪の歌、何事も自然のなりゆきに任ずべきをいふ。楚辭、漁父、漁父莞爾而笑、鼓枻而去、歌曰、澹浪之水清兮、可飲以澹吾濁、澹浪之水濁兮、可飲以澹吾足。孟子、離婁篇にも引きて吾を我に作る。

【澹】 サウ
レウ
【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】 ○シ

○かす、おり(澹)沈澹物、沈「塵」澹、澹○けがれ。けがす「垢」○くろむ(黒)史、屈原傳「嚼然泥而不」者也。

【澹】 シ
支
澹音

○しける、しけし(蕃)○おほし(多)左、倍十五象而後有「○ふゆ。ふやす。○うゑる。まく(蔭)屈原、離騷「余既蘭之九畹兮」○そだつ(生長)書、秦誓「樹德務」○ます、ますます(益)左、昭元「其虐」○○と二字連用するも同じ。○とる(濁)に、す、黒くする。左、哀八「何故使吾水」○○しる(液)禮、檀弓「必有草木之」焉。○よきあち、うまき食物「味」一「養」

【澹】 ○シ

○かす、おり(澹)沈澹物、沈「塵」澹、澹○けがれ。けがす「垢」○くろむ(黒)史、屈原傳「嚼然泥而不」者也。

【澹】 シ
支
澹音

○しける、しけし(蕃)○おほし(多)左、倍十五象而後有「○ふゆ。ふやす。○うゑる。まく(蔭)屈原、離騷「余既蘭之九畹兮」○そだつ(生長)書、秦誓「樹德務」○ます、ますます(益)左、昭元「其虐」○○と二字連用するも同じ。○とる(濁)に、す、黒くする。左、哀八「何故使吾水」○○しる(液)禮、檀弓「必有草木之」焉。○よきあち、うまき食物「味」一「養」

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

【澹】は米をとぐ聲。澹澹。澹澹。

漫 漫(漫) ばんやりとして明かならざる貌。淮南子「聖人内修其本而不外飾其末」一、無爲而無不爲也。大漠の南、即ち内蒙古、次蒙古、戈壁と沙漠の北方の地。○【漫北】(漫) 戈壁と沙漠の北方の地。○【漫南】(漫) 蒙古、内蒙古。○【漫西】(漫) 蒙古、内蒙古。○【漫東】(漫) 蒙古、内蒙古。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫言】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 漫(漫) ばんやりとして明かならざる貌。淮南子「聖人内修其本而不外飾其末」一、無爲而無不爲也。大漠の南、即ち内蒙古、次蒙古、戈壁と沙漠の北方の地。○【漫北】(漫) 戈壁と沙漠の北方の地。○【漫南】(漫) 蒙古、内蒙古。○【漫西】(漫) 蒙古、内蒙古。○【漫東】(漫) 蒙古、内蒙古。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

漫 (漫) 漫言(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。○【漫語】(漫) 漫言に同じ。梁武帝文「不得空作」。

「潜」は水相澤なる。又、めぐる(展轉)

【潛】(潜前條)の俗字。

【潭】セン ㊦

○そそぐ、小水が大水に入る。○水が會する所、おもひ。○さし(匠)○水の聲「然」宗。○深一。○水の流れる聲。王琦詩、石潭正一。

【濠】ソウ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】ツツ

○はく(噴)一噴。

【潭】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【潭】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】ツツ

「學」覺者之「一」、獨勝者之「華」也。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

「學」覺者之「一」、獨勝者之「華」也。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

「學」覺者之「一」、獨勝者之「華」也。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

「學」覺者之「一」、獨勝者之「華」也。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

「學」覺者之「一」、獨勝者之「華」也。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

「學」覺者之「一」、獨勝者之「華」也。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

「學」覺者之「一」、獨勝者之「華」也。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○ふかし(深)ふかくす。○一居「太淺」。○ふち(淵)清一「深一」。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

○はく(噴)一噴。

【澤】㊦ ㊦ ㊦

【濁】タタ 濁音ダク。ゲョク。○こころ。清の對。にごす。にごり。○けがれ。けがれる。みだれる。濁一品行悪し。【濁汗】にごりけがれる。汗は汚。

【濁】タタ 濁音ダク。ゲョク。○こころ。清の對。にごす。にごり。○けがれ。けがれる。みだれる。濁一品行悪し。【濁汗】にごりけがれる。汗は汚。

【濁】タタ 濁音ダク。ゲョク。○こころ。清の對。にごす。にごり。○けがれ。けがれる。みだれる。濁一品行悪し。【濁汗】にごりけがれる。汗は汚。

【濁】タタ 濁音ダク。ゲョク。○こころ。清の對。にごす。にごり。○けがれ。けがれる。みだれる。濁一品行悪し。【濁汗】にごりけがれる。汗は汚。

【澹】タン ①タン ②タン ③タン ④タン ⑤タン ⑥タン ⑦タン ⑧タン ⑨タン ⑩タン ⑪タン ⑫タン ⑬タン ⑭タン ⑮タン ⑯タン ⑰タン ⑱タン ⑲タン ⑳タン ㉑タン ㉒タン ㉓タン ㉔タン ㉕タン ㉖タン ㉗タン ㉘タン ㉙タン ㉚タン ㉛タン ㉜タン ㉝タン ㉞タン ㉟タン ㊱タン ㊲タン ㊳タン ㊴タン ㊵タン ㊶タン ㊷タン ㊸タン ㊹タン ㊺タン ㊻タン ㊼タン ㊽タン ㊾タン ㊿タン

【濃】ダウ ㊿ダウ ○あつし。こし。淡の對。○色が深し。人の情が厚い。味がこつてりしてゐる。○露の多き

【澆】ダウ ㊿ダウ ○あつし。こし。淡の對。○色が深し。人の情が厚い。味がこつてりしてゐる。○露の多き

【澆】ダウ ㊿ダウ ○あつし。こし。淡の對。○色が深し。人の情が厚い。味がこつてりしてゐる。○露の多き

【澆】ダウ ㊿ダウ ○あつし。こし。淡の對。○色が深し。人の情が厚い。味がこつてりしてゐる。○露の多き

【澆】ダウ ㊿ダウ ○あつし。こし。淡の對。○色が深し。人の情が厚い。味がこつてりしてゐる。○露の多き

川の名、山東省に在り。

【濼】 イン 濼

汨ーは水の聲。

【濼】 エイ 濼 又濼にケイ 濼 作る

○濼ーは水のめぐりうづまく貌。○小さき水の貌。

【濼】 カウ 濼 濼 濼

○ほり(城下池)濼。○川の名、安徽省に在り。○一洲は南洋の大陸、一太利亞...

【濼】 カウ 濼 濼 濼

○雨だれのしたたる貌。○にる(煮)詩、周南「是刈是」...

【濼】 カウ 濼 濼 濼

潰ーは水勢の相激する貌。○宮室のおく瀼瀼き貌。○采色きらめきて定まらざる貌。○し(布)○大ーは般の湯王の樂曲の名。

【潤】 潤 潤 潤 潤

○うるほふ、しめる、ぬれる。○うるほす、しめす。○うるほひ、しめり「下ー卑ー〇〇ーは牛の物をかむに耳を動かす貌。詩、小雅「其耳」...

【濕】 シフ 濕 濕 濕

○うるほふ、しめる、ぬれる。○うるほす、しめす。○うるほひ、しめり「下ー卑ー〇〇ーは牛の物をかむに耳を動かす貌。詩、小雅「其耳」...

【濕】 シフ 濕 濕 濕

○わたる(渡)史、樂書「河而西」わたし、わたれば(津頭)〇とどむ、やむ(止)〇なる。なす(成)「美」〇もちふる、利用する。〇ます(益)加へる。左、桓十一「蓋請」師于王〇にぎはしすく(助)易、繫辭「知周乎萬物、而道一天下」〇すくふ、たすく(助)易、繫辭「道一天下」〇おしのける。〇通ず。〇一は莊敬なる貌、おごそか。又、多くしてさかんなる貌。又、威儀の多き貌。○川の名、河南省一源縣の西、王屋山より發し、黄河に入る。

【濟】 セイ 濟 濟 濟

○わたる(渡)史、樂書「河而西」わたし、わたれば(津頭)〇とどむ、やむ(止)〇なる。なす(成)「美」〇もちふる、利用する。〇ます(益)加へる。左、桓十一「蓋請」師于王〇にぎはしすく(助)易、繫辭「知周乎萬物、而道一天下」〇すくふ、たすく(助)易、繫辭「道一天下」〇おしのける。〇通ず。〇一は莊敬なる貌、おごそか。又、多くしてさかんなる貌。又、威儀の多き貌。○川の名、河南省一源縣の西、王屋山より發し、黄河に入る。

【濟】 セイ 濟 濟 濟

【瀼】 ジュ 瀼 瀼 瀼

○うるほふ、ぬれる、ひたる(瀼)しめる(瀼)〇ぬらす、ひたす。詩、邶風「不」軌〇めぐみ、うるほひ。〇一忍はたへしのぶ(堪忍)〇とどこはる(瀼)〇つや(瀼)〇みづみづしくして光澤あり。詩、小雅「六轡如」〇やはらか。〇ゆばり(瀼)〇史、倉公傳「不亟治病必入」腎〇ならふ(瀼)なれる。

【瀼】 ジュ 瀼 瀼 瀼

○わたる(渡)史、樂書「河而西」わたし、わたれば(津頭)〇とどむ、やむ(止)〇なる。なす(成)「美」〇もちふる、利用する。〇ます(益)加へる。左、桓十一「蓋請」師于王〇にぎはしすく(助)易、繫辭「知周乎萬物、而道一天下」〇すくふ、たすく(助)易、繫辭「道一天下」〇おしのける。〇通ず。〇一は莊敬なる貌、おごそか。又、多くしてさかんなる貌。又、威儀の多き貌。○川の名、河南省一源縣の西、王屋山より發し、黄河に入る。

【瀼】 ジュ 瀼 瀼 瀼

○わたる(渡)史、樂書「河而西」わたし、わたれば(津頭)〇とどむ、やむ(止)〇なる。なす(成)「美」〇もちふる、利用する。〇ます(益)加へる。左、桓十一「蓋請」師于王〇にぎはしすく(助)易、繫辭「知周乎萬物、而道一天下」〇すくふ、たすく(助)易、繫辭「道一天下」〇おしのける。〇通ず。〇一は莊敬なる貌、おごそか。又、多くしてさかんなる貌。又、威儀の多き貌。○川の名、河南省一源縣の西、王屋山より發し、黄河に入る。

【瀼】 ジュ 瀼 瀼 瀼

○わたる(渡)史、樂書「河而西」わたし、わたれば(津頭)〇とどむ、やむ(止)〇なる。なす(成)「美」〇もちふる、利用する。〇ます(益)加へる。左、桓十一「蓋請」師于王〇にぎはしすく(助)易、繫辭「知周乎萬物、而道一天下」〇すくふ、たすく(助)易、繫辭「道一天下」〇おしのける。〇通ず。〇一は莊敬なる貌、おごそか。又、多くしてさかんなる貌。又、威儀の多き貌。○川の名、河南省一源縣の西、王屋山より發し、黄河に入る。

【瀼】 ジュ 瀼 瀼 瀼

○わたる(渡)史、樂書「河而西」わたし、わたれば(津頭)〇とどむ、やむ(止)〇なる。なす(成)「美」〇もちふる、利用する。〇ます(益)加へる。左、桓十一「蓋請」師于王〇にぎはしすく(助)易、繫辭「知周乎萬物、而道一天下」〇すくふ、たすく(助)易、繫辭「道一天下」〇おしのける。〇通ず。〇一は莊敬なる貌、おごそか。又、多くしてさかんなる貌。又、威儀の多き貌。○川の名、河南省一源縣の西、王屋山より發し、黄河に入る。

【瀼】 ジュ 瀼 瀼 瀼

○わたる(渡)史、樂書「河而西」わたし、わたれば(津頭)〇とどむ、やむ(止)〇なる。なす(成)「美」〇もちふる、利用する。〇ます(益)加へる。左、桓十一「蓋請」師于王〇にぎはしすく(助)易、繫辭「知周乎萬物、而道一天下」〇すくふ、たすく(助)易、繫辭「道一天下」〇おしのける。〇通ず。〇一は莊敬なる貌、おごそか。又、多くしてさかんなる貌。又、威儀の多き貌。○川の名、河南省一源縣の西、王屋山より發し、黄河に入る。

【瀼】 ジュ 瀼 瀼 瀼

○わたる(渡)史、樂書「河而西」わたし、わたれば(津頭)〇とどむ、やむ(止)〇なる。なす(成)「美」〇もちふる、利用する。〇ます(益)加へる。左、桓十一「蓋請」師于王〇にぎはしすく(助)易、繫辭「知周乎萬物、而道一天下」〇すくふ、たすく(助)易、繫辭「道一天下」〇おしのける。〇通ず。〇一は莊敬なる貌、おごそか。又、多くしてさかんなる貌。又、威儀の多き貌。○川の名、河南省一源縣の西、王屋山より發し、黄河に入る。

【瀼】 ジュ 瀼 瀼 瀼

【漬】

○みぞ(溝)こみぞ、どぶ(小渠)「汗」論、惠問「自經」於溝「」〇四一は江河淮濟の四大川の稱。〇に「す」に「る(濁)」がす(汚)けがる「襲」〇あなどる(慢)押れ近づく。禮、少儀「母」神「〇かきなる(重)複」〇に「り」。〇句一は春秋の宋の地名。〇くぐりあな。左。妻三十「自塞門之一入」竄に通ず。

【瀑】

一滝は水の疾く流れる貌。①ホク、ボク ②通音ハク、ボク ③バク
○たき(飛泉、懸泉)「飛」〇水の沸く貌。又其の聲。〇瀆一は波浪のわき起つ貌。〇「飛流以界道」二飛泉。〇「飛流以界道」二飛泉。

映江月、一山出各瀆〇瀆疾の貌。宋玉、九辨、乘馭之「一」〇瀆「亮」〇よくあきらか。陸機、文賦「賦體物而一」

【漈】

〇こす(漈)紗又は葛布などに水をこして滓を去る。〇あらふ(洗)すます(澄)「漈」
〇こす(漈)紗又は葛布などに水をこして滓を去る。〇あらふ(洗)すます(澄)

【漈】

〇きよし(清)詩、鄭風「其清矣」ふかし(深)〇風の疾い貌。楚辭、九歌「秋風一以蕭蕭」〇きよくあきらかなる貌。

【瀼】

〇水がひろくして、はてしなし「沈」〇「浩」〇「混」〇「濇」(水部十一畫)の古字。

【瀼】

一瀼は水の深くして廣き貌。淮南、覽冥「瀼極望」

【漨】

一漨は雪の盛んにふる貌。詩、小雅「雨雪一」
〇ぬる(塗)〇ぬぐ(ふ)拭(成)〇

【漨】

〇せ、水が沙上を流れる、淺きながら。楚辭、九歌「石一兮淺淺」〇はやきながら(急瀼)「迅」〇怒一「瀼一」急一

【漨】

〇おほうみ(大海)〇水の貌。〇澤の中。〇一洲は海中に在りて仙人の棲めりと傳ふる三神山の。史、始皇紀「海中有三神山名曰蓬萊、方丈、一洲」

【漨】

〇みぎは(水陸)はま。〇瀆。〇そふ(沿)〇せまる(迫)のぞむ

【瀨】

〇したたる(水下瀉)「瀉」したる。〇ながれる、そそぐ。〇したたり、しづく「瀉」〇餘一〇瀉一は雪霰の聲。又、風の聲。〇一液は激しくなる水流。張衡、思立賦「激飛泉之一液兮」〇清酒。

【瀨】

〇雨の降る貌。〇ひたす(瀆)うるほす。〇川の名。〇州の名。〇一岡は山名、江西省永豐縣沙溪に在り。歐陽修に「岡阡表あり。〇はやせ(奔瀨)「奔一」驚一〇瀉」瀑布の義とす。

【瀨】

〇みぎは(水陸)はま。〇瀆。〇そふ(沿)〇せまる(迫)のぞむ

【瀨】

〇したたる(水下瀉)「瀉」したる。〇ながれる、そそぐ。〇したたり、しづく「瀉」〇餘一〇瀉一は雪霰の聲。又、風の聲。〇一液は激しくなる水流。張衡、思立賦「激飛泉之一液兮」〇清酒。

【瀨】

〇雨の降る貌。〇ひたす(瀆)うるほす。〇川の名。〇州の名。〇一岡は山名、江西省永豐縣沙溪に在り。歐陽修に「岡阡表あり。〇はやせ(奔瀨)「奔一」驚一〇瀉」瀑布の義とす。

【漈】

〇こす(漈)紗又は葛布などに水をこして滓を去る。〇あらふ(洗)すます(澄)「漈」
〇こす(漈)紗又は葛布などに水をこして滓を去る。〇あらふ(洗)すます(澄)

【漈】

〇きよし(清)詩、鄭風「其清矣」ふかし(深)〇風の疾い貌。楚辭、九歌「秋風一以蕭蕭」〇きよくあきらかなる貌。

【漈】

〇水がひろくして、はてしなし「沈」〇「浩」〇「混」〇「濇」(水部十一畫)の古字。

【漈】

〇せ、水が沙上を流れる、淺きながら。楚辭、九歌「石一兮淺淺」〇はやきながら(急瀼)「迅」〇怒一「瀼一」急一

【漈】

〇みぎは(水陸)はま。〇瀆。〇そふ(沿)〇せまる(迫)のぞむ

○瀾

○なる(煮)○ゆびく。○あらふ(瀾)○はやし、流疾し。

○なみ、大いなる波「洪一」「狂一」「驚一」○なみたつ。又其の形容。

【瀾】(ラ) さざなみ。爾雅「一、水波也」。瀾瀾、瀾瀾。
【瀾】(ラ) 波の長くうねる貌。木華「海賦」洪濤「一、萬里無際」。竹「游麟賦」一「一」瀾瀾。湘波「一」おほいなるなみ。新論「一」瀾瀾。一「一」洶湧。一「一」瀾瀾。海賦「一」復動、波色還瀾。【瀾】(ラ) 淋漓したる貌。又、分散する貌。王褒「洞簫賦」○物の亂雜なる貌。淮南「覽冥」夏菜之時、主闇晦而不明、瀾一而不修。【瀾】(ラ) 涙の流れる貌。元稹詩「今君爲我千萬彈、烏啼嗚咽淚一」。

【瀾】(ラ) 水のあふれる貌。又、水の動く貌。木華「海賦」激浪一、浮天無岸。一「一」瀾は瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。

【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。

【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。

○瀾

○水のそそぎかける。○善き訓を心につきこむ。李綱詩「豈無三萬雅川、妙論表一」。

○水の小さき聲。○瀾一は游魚の出没する貌。周居賦「游鱗瀾一」又、石の水中に出没する貌。又水の流れる聲。

【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。

○瀾

○なみ、大いなる波「洪一」「狂一」「驚一」○なみたつ。又其の形容。

【瀾】(ラ) さざなみ。爾雅「一、水波也」。瀾瀾、瀾瀾。
【瀾】(ラ) 波の長くうねる貌。木華「海賦」洪濤「一、萬里無際」。竹「游麟賦」一「一」瀾瀾。湘波「一」おほいなるなみ。新論「一」瀾瀾。一「一」洶湧。一「一」瀾瀾。海賦「一」復動、波色還瀾。【瀾】(ラ) 淋漓したる貌。又、分散する貌。王褒「洞簫賦」○物の亂雜なる貌。淮南「覽冥」夏菜之時、主闇晦而不明、瀾一而不修。【瀾】(ラ) 涙の流れる貌。元稹詩「今君爲我千萬彈、烏啼嗚咽淚一」。

○瀾

○水のそそぎかける。○善き訓を心につきこむ。李綱詩「豈無三萬雅川、妙論表一」。

【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。

○瀾

○水のそそぎかける。○善き訓を心につきこむ。李綱詩「豈無三萬雅川、妙論表一」。

【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。

○瀾

○水のそそぎかける。○善き訓を心につきこむ。李綱詩「豈無三萬雅川、妙論表一」。

【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。【瀾】(ラ) 瀾瀾、瀾瀾。

○澗

○せ(澗)はやせ、水浅く石多

【澗】(カ) 澗澗、澗澗。【澗】(カ) 澗澗、澗澗。【澗】(カ) 澗澗、澗澗。【澗】(カ) 澗澗、澗澗。

○澗

○水の流れる貌。○澗一は雪霜の貌。淮南、原道「雪霜澗一」。

【澗】(カ) 澗澗、澗澗。【澗】(カ) 澗澗、澗澗。【澗】(カ) 澗澗、澗澗。【澗】(カ) 澗澗、澗澗。

○澗

○水のそそぎかける。○善き訓を心につきこむ。李綱詩「豈無三萬雅川、妙論表一」。

【澗】(カ) 澗澗、澗澗。【澗】(カ) 澗澗、澗澗。【澗】(カ) 澗澗、澗澗。【澗】(カ) 澗澗、澗澗。

○澗

○水のそそぎかける。○善き訓を心につきこむ。李綱詩「豈無三萬雅川、妙論表一」。

【澗】(カ) 澗澗、澗澗。【澗】(カ) 澗澗、澗澗。【澗】(カ) 澗澗、澗澗。【澗】(カ) 澗澗、澗澗。